物産寶庫　甲　八

木竹類

合
A 00
5765

東京大学総合図書館

カツラ

武州多摩郡柚木（ユギ）村養蚕場ヘ引用スル溪流ノ水ノ地ニ小
神ノ小社アリ其社後ニカツラノ大樹アリ老廃セル朽木ノ残
ス所蘖数株一叢トナリ各成ル長大ノ幹トナル其他ノ外ニハ更ニ
ナシト云フ成程杉柏檜等ノミナリ
同村ノ一里余御嶽（ミタケ）山ヘ入口ノ橋ノ内ニ拔所アリ其池辺
ニ前同様ノ朽木ノ蘖大幹ヲナスモノ四本許アリ大ナルハ
数囲其高サ数十尺ナルヲ以テ雄雌ヲ弁スル能ハズ
然ルニ幸ニシテ結実ノ一小枝池内ニ浮テ渇タリ採スルニ
虫ノ蠹ニ因テ折傷スルナリ其実ノ莢ハ長サ二三分ニシテ

No. 8
A00
5765
東京帝國大學圖書之印
B 45222
男爵田中美津男氏寄贈
先代田中芳男男旧蔵書
昭和七年
東京大学総合図書館

各葉腋ニ叢生ス初テ雌本アルヲ知ル　此辺ニ小木ハアレ氏小嫩苗
ヲ見ズ又他所ニ生ルヲ見ル事ナシ　南岳山ニ登ルニ更ニ見ズ
従前植付シ者ナルカ又ハ他所ノモノヲ切リ此樹ノミ残スカ未ダ知ル
事能ハズ
東京ニテハ　早稲田病院ノ内ニ一本　駒場之農園内ニ一本
山王ノ山内ニ数本　矢丈本アリ

明治十一年八月十四日

田中芳男記

タニクハ　アブラチヤン　二種産地形状功用等ヲ記ス

會員群馬縣下上野國新田郡牛澤村石谷清明氏ヨリ
曩ニ「タニグハ」外一種ノ産地形状及効用ノ質問ニ答
フ

タニグハ　一名　フサザクラ　イトザクラ　ナツマンサク
シベザクラ　カウヤマンサク　此他方言多シ
漢名不詳古説救荒本草雪桑〔葉〕ニ充ツ
林娜氏綱目第十三綱第六目
自然科目　木蘭科
羅甸名　*Euptelea polyandra.*
武州秩父相州箱根野州日光等諸國山中ニ自生多シ
落葉喬木ニシテ大ナルハ幹高サ數丈圍ミ合抱ノモノ

アリ葉ハ互生心臓様ニシテ頭尖リ周縁ニ不齊ノ粗鋸
齒アリ其葉柄長サ二寸許春月新葉未タ生セサル前
ハ枝梢葉腋ニ細小ノ數花房ヲ攅簇シテ開ク萼瓣不正
苞ヲ脱シテ多雄蘂多雌蘂ヲ露出ス葯膜赤色ナリ後
楡錢状ノ小莢ヲ結ブ而シテ其材質ハ堅硬ニシテ軟緻
潔白色ナルヲ以テ挽物細工及ヒ小器物ヲ作ルニ用
ヰ其他ハ薪炭ノ材料トナスノミ

アブラチヤン 一名ムラダチ コヤスノキ
ハゼムラダチ テハジキヅサ

漢名不詳

林娜氏綱目第九綱第一目

自然科目樟科

羅甸名 *Lindera praecox.*

産地前條ニ同シ落葉木ニシテ樹ノ大ナルハ高サ一二
丈圍ミ尺餘ニ及ブ其葉ノ形ハ楕圓或ハ卵圓ヲ交ヘ
尖頭ニシテ互生柄ノ長サ一寸餘アリ春新葉未タ出芽
ノ前ヘ枝梢各所ニ淡黄色ノ細小花ヲ攅生ス六瓣九
雄蘂一雌蘂トス後指頭大ノ圓實ヲ着ク熟シテ帯黄
緑色ニ変ス而シテ其材質ハ緻密堅硬ニシテ帯黄白色
ナリ然レモ主トシテ材木ニ用ヰルノ説ヲ聞カズ又
地方ニヨリテハ此實子ヲ壓シテ油ヲ搾リ以テ燈火
ノ用ニ供ス民益頗ル多シト云フ

明治十三年九月廿八日 小野職愨

椅 カウセンダン

又イヽギリ 又イヌギリ 又ナンテンギリ 伝 薩摩ニテハカラセンダント云フ 羅甸名ハ*Idesia polycarpa* Max. 巴棘科ニ属ス 落葉喬木ニシテ雄本雌本アリ 十二月頃実紅熟シテ形色恰モ南天子ノ如クシテ較大ナリ 内ニ細子多シ 割リ出シテ蒔カザレバ生芽セズト云フ

上野公園官舎ノ庭ニ雄本一株アリ 高サ三丈許 枝ハ層ヲナシ一節ヨリ五六本ツヽ四方ヘ出シ 梢ノ勢ヨリハ却テ枝ノ勢強ク延ビタリ 故ニ梢端ハ瘦小ナリ 枝ノ出ヅル全形ハ葉ノ筋ニ比スルヨリ尚延長勢ナリ

花ハ穂状ヲナシ下垂ス 皆長一尺許 穂ノ本ニハ四五小梗

農商務省

三分ツヽニ一穂ハ花数五十許ナリ蘂ナシ葛ノニニ三ノ其数
四五六七枚アリ多雄蘂一花ノ大サ径七分ニ至ル香気馥郁
タリ萼淡緑色花線状黄色葯鮮黄色ナリ蕾ノ
形ハ豆粒ノ如ク径二分許アリ開ケ初ハ穂ノ半央ニシテ次第
ニ本末ニ及フ花ノ開初ハ穂ノ八月二十日頃ニシテ三十日ノ
頃ハ最モ盛ナリ過半花落セリ動物園雄本アリ本日頃
花盛ナリ由又外ニ雄本十アリ且之ヲ本目今ノ花盛ナリトス
小野君雄本ノ盆栽ハ接木ニテ長二尺餘ナレトモ花開ク

十五年五月三日　田中芳男記

栗氏圖森中抜萃

鼠梓　和名　南天桐
ケラギリトモ云又トウナンテン カラセンダンモ云 四月中旬開
花穂下垂メ可愛但花弁ハ翌日ニ至テ花輪斗
散落ツ微香アリ
此ケラギリ藍水翁鼠梓ニ充ツ梓集解頌曰一種揀
赤楸属也枝葉木理皆如楸今人謂之苦楸江東
人謂之虎梓詩小雅北山有楰是也
丹州按此木喬幹直聳作層正整可観至有花実
而下垂両如線秋末子熟則累々総穂如南天燭
葉落尚存于枝上色如琉朱堪為壮観按本綱
楸條珍説楸有行列茎幹直聳可愛至上垂條如

農商務省

線譜之楸線ト云古ノ説ハ㞢蘤ヲ指シテ云結子鮮紅可愛
ラシ缺ク故ニ此楸線ハ木サヽキノ角細長ク如著下垂スルモノ
トスルハ誤ナリ

イヽギリ下種ノ法

宍戸昌曰椅桐ハ單ニ下種シテハ更ニ生ゼズ
実ヲ砕シ細子ヲ出シ下種スレバ容易ニ生ス尚
南天子ヲ下種スル法ニ同ジト然リ種子ハ
乾シテ害スルモノニシテ直ニ蒔付ルモノヽ外ハ大抵
種子ヲ出シ蒔ク方宜シキヲ多シ
鳥陶ハ下種シテ生スヘシ植換ニ至シ翌月ナレバ害セ

十五年十二月二十一

田中芳男記

博物局

○オホセンダン

鹿児島ニハ尋常品ノ外ニ大ナルアリ昔ハ種子ニ殖シ植ヱ（一ニオホセンダント云フ）
下總種高嶋ニ存セリ又永田町阿部氏ノ邸内ニ数株アリ
樹ハ高サ一丈以上ニ至リ多ク実ヲ結フ因テ同氏ニ乞ヒ種子
ヲ得タリ
実ハ楕円ニシテ長八分径七分許アリ核長五分五厘ニシテ其形
ニ似タリ較ヤ楕円ヲナス尋常品ハ実長五分核径ヨリ五分
園官舎内ノ者ハ実正圓ニシテ径六分核径ニシテ稜角六ヲ有
アリ実ノ形ハ数ニテ核大ナリ（楝樹）楝核ノ稜角ハ六七又四五アリテ
一定セザルモノナリ
大樹ハ樹ノ成長速ニシテ且実モ大ナリ是ハ啓蒙ニモ載ス
カカル漢種ヲ伊藤翁モ泡セシ实施大（レトノ云フ）

椿材ハ梓又椿ニ似テ赤褐色美麗ナル處ニ至テ
ハ七桃角ナリトテフ
上海ノ海岸ニ並ヘ植ヘ可シ椿ハ寧ロ北ナル実ノ者ト
愛ヘタリ然ニ支那ハ悪ク以テ大椿ト云フ非ナリハ勿論書
ハ諸書ニモ各種アルヲ見ユヘシ又昔椿ト云フ名アレ凡今
此三品ノ実ハ其味ヲ覚ヘザリシ
謁然ルニ唐與島ニ来タル田君ノ父君植付ケタリ何地ヨリ種子
ヲ取寄セタルニハ知ラズ今年ハ陰地ニテ陰影ノ為メニ植ヘ樹ハナリ
又且突島ニ成長シタルニ又一本ノ実ノヒコバリノ如キモ
ヌル事ナルモ此実ハ大ナルハ以テ食ニ又搾ニ油多ク石鹸ト
スベシト云フ

十五年十一月十六日

田中芳男記

丹後ノ海上八里ほど大島小島ト云島アリ此樹ノ産多シ本地ニ於テハ最絶テ此ノ品ヲ見ズ至テ美赤白し

○チャンチン 椿

本草啓蒙并圖譜ニ詳載ス就テ見ルヘシ今丹波人ノ語ニ因リテ次ニ記載ス
此樹丹波丹後ニ自生多ク大ナルハ二圍モアリ殊ニ丹波何鹿(イカルガ)郡ニ多ク生ス通例クサギト稱ス其臭氣アルニ因ル又樹ノ直立シテ高ク長ズルニ因リセイウンボクト稱シ青雲ニ志アル人ハ殊更ニ植ルト云此樹皮甚強靱ニメ樹ノ本ニ傷ケ剥ゲハ梢マデ能ク剥取ベシ故ニ往昔竹ヲ以テ箍ニ用ルノコトナキ前ハ此皮ヲ以テ桶ノ箍ニ

用ヒレト云今尚山地ニテハ稀ニ桶箍ニ用ルモノアリ此材強クシテ木理雅ナレハ板トナシ机卓ノ類ニ製シ甚宜シ又三弦ノ胴ニ作リテ東京ヘ出ス工人之ヲ以テ舶来ノ花梨木ニ擬ス但シ材ニ赤色ト白色トアリ赤色ノ者ハ最モ花梨ニ近キユヘ容易ニ花梨木ニ擬スベシ白色ノ者ハ品少ク劣ル故ヘ染テ赤色トナスナリ此白ト赤トノ区別ハ此樹ノ新芽ニ赤ト白トアルニ因ルカ未タ考ヘズ

此樹ニ雄本雌本アリ雌本ハ花後ニ実アリ五月頃梢頭ニ穂ヲ出シ枝ヲ分チ白色五弁ノ小花ヲ開ク花後莢ヲ結フ連翹ノ実ニ似テ長ク後チ五裂トナリ種子ヲ散ス大樹ニアラザレハ花実ナシ今京ニアル品ハ皆雄本ナリト云又尋常ノ椿(チャンチン)ヲ「シロクサギ」樗(ゴンズイ)ヲ「クロクサギ」ト区別シ称スルヨシ

按ニ椿(チャンチン)ハ樗(ゴンズイ)ト大ニ異リテ其科モ亦同シカラズト雖モ未タ西洋名ヲ得ズ今西洋諸書ヲ閲シテ Cedrelaceae ノ科中ナルヿヲ知ル且桃花心木(マホガニ)ノ如キ美材ヲ出セル樹モ亦又此科中

ニアリ因テ此科ヲ名ケテ椿科ト称ス

桃洞遺筆第拳輯巻三初葉ニ椿ノ説ヲ載ス

香椿（チヤンチン）　俗アラヽギ　ヤマゴムノキ　又雷除ケ木　又天ヒレシラズ

此木ハ即椿科ノ属ニ形稍似タレ圧此ハ外皮臭ク立樹高大ニナラサレバ花ナシ実ノ形アイランチニスニ似タレ圧穂ヲナサズメ一果ノ内ヨリ多ノ種ヲ出スナリ其ノ種ノ形亦ヤヽ似タレ圧其形ハ松ノ種ニ似テアイラレチニスノ種ハ ノ如此ナルナリ

エイラレチニス　苦白木科ニ属ス

田中芳男

Ailanthus glandulosa, Smith.

スミット氏漢薬韻府ニ出ツ

チヤンチン材（其他材）ノ効用

藤井徹曰 能登ニテハ香椿ノ材ヲ以テ味噌桶ニ採用ス 是ハ塩気ノ外ヘ滲出スルヲ防クノ効アリ故ニ 味噌豆又漬物桶ニモ宜シト

此材ハ但馬丹後等ニテハ机箱等ニ用フルヿハ已ニ物産宝庫ニ記載セル通リ

又曰 梧桐ノ材ハ 鎔鉄ヲ掬フノ匕ニ宜シト

是ハ生松材ヲ鎔解セル鐐物ノ容器ノ栓ニ用ルト同シク 生材尤ヤ知ルヘカラス

擬合歓ノ材大カ挽ニトテヲ炭トシテ佳ナランカタ

博物局

識ラズ
近年梨材ヲ陸軍武器ニ採用スルヨリ價ヲ進メタリ
青山善他ニ云ク ワヌノ手 近年ノ マッチ材ニ用ユルニ
四ツ忽ニシテ價アリ 苗木ヨリ賣ル者ノ撒布始テ
實ヲナスノ 莖葉 長サ一尺二三寸アリ 線葉ノ
長サ亦長シ 然レトモ 綿子ニ譲スニ飛散ス

十三年十二月二日
田中芳男記

博物局

ケンポナシ 枳椇

林氏第五綱第一目
自然分科鼠李科

Hovenia dulcis Thunb.

(Rhamnaceae)

東京近々山野ニ産スル落葉木ニシテ高弐三丈アリ春月新葉ヲ生ス形卵円大サ三四寸緑色ニシテ端尖リ縁ニ粗鋸歯アリ互生ス夏至ノ前枝梢葉腋ヨリ穂ヲ抽キ細梗ヲ分チ頂ニ細小花ヲ攅簇ス大サ一分許萼五裂シ短披針状ニシテ淡黄緑色花又同色ニシテ稍淡ク匕様ヲナシテ両辺上ヘ巻キ雄蕊五茎アリ子床ニ着キ花糸毎弁ノ上面中央ニ倒レ葯膜全黄弁尖ニ挺出

博覧会事務局

雌蕋一箇柱頭ニ出子房柯子狀ニシテ最モ微小扁円盤ノ
中心ニ座ス結實ノ形未タ精撿セズ来日成熟ヲ俟テ精
説ヲ記スベシ
一種葉柄共ニ毛茸アル者アリ同物ヤ如何ノ知ラズ識
者ニ問フベシ
八年六月廿弐日記

瀬濃楕頭

下野産七葉樹根塊

明治十七年九月下旬福島縣下岩代國南會津郡ヨリ
新道ヲ経過シ栃木縣下下野國塩屋郡塩原ト峠
ヲ越ヘ善知鳥(ウトウ)峠ノ栃木縣土木課出張所ヘ至ル同所
ニ庭ニ此地ヨリ堀出ス七葉樹ノ根塊許多アリ
掛リ員ノ云フ此塊ハ此新道ヲ作ル時此辺ヨリ
下ノ方ナル七葉樹ノ老根ヲ堀起スニ其根ヨリ
出シモノニシテ老木ニハ皆アリ多キハ一株ヨリ二十個
モ出タリ他所ニテハ未タ見ルコトナシ因テ栃木縣ノ
栃瘤ト称シテ其小ナル瘤五十個許ヲ縣庁ヘ送リ

旧所ニテハ之ヲ湯ニ煮テ外皮ヲ去リ能截シテ二ツト
ナシ内部ヲ削リテ漆ヲ塗リ盃トナシ今般新設開
通式ニ陳セル、貴県ヘ一つ寄贈セル器ナリト云ヘリ之
ヲ熟視スルニ大ナルハ人頭ノ如クナルハ拳頭ノ如シ皆
細小ナル根ニ附着キ外皮厚ク融結シテ鬚根アリ
又別ニ形鳥卵ノ如ク長クシテ皮ヲ層リ鬚根ナク
連珠状ヲナスモノアリ是ハ塊ト瘤トハ稍異ナルモノナリ
我ハ一時ノ奇覧ニ止ラス東京ノ博物館及山林学
校ヘ携ヘ置ハ永ク旧所ニ保存シ広ク衆庶
ニ示シ学術上ノ裨益アルヘキニヨリ両所ヘ贈

附アランコヲ請求シ置タルニ此頃栃木県[illegible]ヘ
而ナシ先ツ来リ因テ其内一塊ヲ館蔵シ内
畧ノ視ルヘキ者ヲ添ヘテ博物館及山林学校ヘ送
当分他ノ博物館ヘモ展覧セシムトス

明治十五年十二月十日　田中芳男記

[illegible]写　[illegible]

菩提樹子念珠ノヿ

明治十一年五月 田中芳男記

紀州高野山ニハ漢種ノ菩提樹アリ其子実ヲ採集ニテ念珠ヲ製シ販売ス該地ノ一産タリ之ヲ製スルニハ水ニ浸シ軟ニナルヲ待チ上下ヲ削キ而シテ鏇作シテ圓形トナストミフ

今同地製ノ圓珠ヲ集メ作ルノ念珠ヲ町田氏ニ蔵ス査スルニ圓径二分八厘アリテ五ツノ縦條アリ其色暗茶ナリ質堅強ニハ非ザレ𪜈念珠トナスニ堪エ

東京大学総合図書館

梧桐ヲ並木ニ植ル経験

武州多摩郡青梅驛ハ三年前ニ並木ヲ植タリシガ屢枯レテ植替ヘモアリシガ今尚十分ナラザルモ各種ノ樹大低生殖セリ素ヨリ並木ヲ豫メ用意シテ植ルニ非ルヲ以テ樹ノ種類一様ナラズ何モ老大ノ樹多ク先ツ梅桜梨根百日紅松等ノ如キ庭樹ナリ其内梧桐樹五六本アリ皆相應ノ大サニシテ一間位ヨリ数幹ヲ分ツモノ多シ其内一本葉ヲ振ヒ今新ニ萌芽スルアレモ其他ハ皆繁盛ニシテ修葉欝葱タルハ他ノ老樹ノ看ニ異リ且幹皮ニ多ノ毀傷ヲ受ルモ程能癒着脾胝状ヲナシタリ

茲ニ於テ始テ梧桐ノ垂木ニ供用シテ害ナキヲ見タリ
殊ニ他樹ハ皆老衰ノ姿アルモ此樹ニ至リテハ成葉甚タ
盛ニシテ更ニ妨害ヲ被ルコトナキヲ知ル

明治十一年八月十六日　田中芳男記

ヒヨンノキ

蚊母樹

林氏自然科第十目一万作科

常緑木ニシテ高サ二三丈葉形楕円全邊ニシテ厚ク
面ヽ緑光アリ穀雨ノ前後葉腋ヨリ花穂ヲ出ス
長サ一寸二三分アリ五六花ツヽ聚ル花ニ弁ナリ
苞ハ針状互列スル萼アリ雄蕊五六又六七ニ至ル
ノ者アリ子房ノ縁ニハ毛アリ花柱ニ紫暗紅色三経道アリ

両邊ヨリ縦裂シテ能黄粉ヲ吐ク二雌蕋長出左
右ニ分レテ濃ソナス子房ハ杯子状ヲ微ニ大ナリ
麦粒ノ比シ

明治八年四月廿八日記

新白色ニシテ美シ
氏木ヲ建築等ノ
用ニ充ツ聞ク唯
筆鑚師是ヲ
中國ノ玩具ヲ製シ
今白質緻密ニシテ
美ナルヲ以テ之ヲ尊フ
ト云フ

ミヅキ

Cornus brachypoda, C. A.

自然分科　山茱萸科

林氏第四綱一目

四月枝頭ニ新葉数枚ヲ出シ中心ヨリ一茎ヲ抽
キ繖花ヲ綴ル葉形楕圓ニシテ微尖頭全邊ナリ
葉柄長ク葉面黄緑色光澤アリ葉背粉白光澤ナ
シ蕚形壷様端四裂シ花瓣狹長披針状四裂白青
色ニシテ微香アリ雄蕋四本長ク出テ葯膜淡黄
ヽシテ黄粉ヲ吐ク一雌蕋短クシテ柱頭ニ粘液

博物局

ヨヽギ

東京府外代々木村ハヨヽギト云フ樹アルニ因テ名クル由今其樹ヲ駒場野ヨリ取寄ルニ左ノ墨摺ノ如ク榔榆ナリ

表

裏

黄楊　伊豆天城産ニテハゲニ同シキモノ

武州多摩郡御岳（ミタケ）山上本社ノ邊ニ数本アルヲ見ル高キハ
二三間アリ大ナルハ拳大ヲ越ヘズ痩悴スル者ニシテ繁盛ニハ
非ズ且樹間又樹陰ニハ樹勢固ニカラザルニ似タリ
右樹ハ余ヲ植付タルモノト見ヘ他ニアルコトナシ其地ノ人ニ問フニ樹ハ
其地ヨリ五里許玉川ノ上流ニッパラ官林ニ多クアリトゾ

信樹ヲ駒場ニテハ「ヨキ」ト御呼申上
「ツメタキ」ハ信樹葉ニ候由御
ツ樽様希上候也
八月廿三日
拓殖

明治十年八月廿三日　田中芳男記

東京大学総合図書館

此項ハ字ヲ以テ飲食部ニ入ル
トコフ葉ヲホウチト為スニ非ス生葉ヲ灰汁ニテ煠テ湯ニテ
以テ菜ノ和合物トスル事猶鼠麹草ノ艾葉等ヲ用ル如キ也
甚味佳美ナル事艾葉ニ優ルト云ヘリ

明治十一年八月十四
田中芳男記

欅材養護ノ義上申

本邦ハ東洋ノ屹立スル一大島嶼ナレハ國ヲ護スルノ堅艦無ル可ラザルハ論ヲ俟ス堅艦ヲ造ルノ要ハ勉テ良材ヲ得ルニアリ良材ヲ得ルノ術ハ内國所産ノ艦材ニ適スル樹ヲ養護スルニアリ内國所産ノ樹木品類多シト雖モ歐人ノ言ク聞クニ地球上ニ産スル樹木中艦材ニ適スル好良ノ材ハ暹羅産「チーキ」材ヲ以テ第一トス其他之ニ亞テ艦材ニ適スル材ハ本邦所産ノ欅ノ右ニ出

内務省

ルモノナラント今材質ヲ審視セハ歐人ノ説
ヲ信スルニ足レリ故ニ欅ハ世界第ニ位ス
ル良品善質ノ樹ナレハ愛護保養ノ道立ザ
ル可ラズ然レドモ欅樹ハ古来官民共ニ檜
杉松ノ如ク栽植スルナク只自然生ノ樹ヲ
伐採シテ需用ニ供シタレド近来造船其他
工業ノ用日一日ヨリ多クシテ伐採ニ便ナ
ル地方ハ追々伐出シ遂ニ該材今日ノ騰貴
ヲ致セリ欅材ハ日向ノ産ヲ以テ海内ニ名
アルモノハ陶土質ノ燹地ニ生ジタル樹ハ

材質最堅硬（今一例ヲ擧ケテ證ス豆州天城山ノ欅材ヲ見ルニ河津口ノ材ハ水ニ沈ミ大見口ノ材ハ水ニ浮フ河津口ハ東南大島ニ向フ燹地ニシテ大見口ハ富士山ニ對シ北ノ向ナレハナリ）ナレバ九州四國中
其他東南向ノ山林ニ生シタル材ヲ最良ト
ス斯ノ如キ貴重ノ欅材ヲ産スルハ本邦ノ
大幸ナレバ須該樹保護ノ道ト蕃殖ノ法方
トヲ立ルハ方今ノ一大急務ニシテ該樹蕃
殖シテ造船工業ノ用ニ供シ其有餘ヲ以テ
海外ニ輸出スルニ至ラバ其益タル僅少ナ
ラザルナリ依テ内務省地理局ニ協議ノ上
官林中欅ノ良材ノ産出シテ伐採ニ便ナル

地方ニ於テ現今造舩ノ用ニ供スヘキ材ヲ取調ヘ嫩木ノ伐採ヲ禁シ苗木ヲ移植シ欅樹ヲシテ益蕃生セシムルノ法方相立候様仕度依之別紙欅栽植法ノ略記相添此段上申仕候也

明治十一年四月　片山直人

造舩所長

中牟田倉之助殿

欅（ケヤキ）

欅ハ暖國ニ生スル樹ニシテ寒國ニ生ズル樹ニアラズ故ニ北海道及高山ノ峻嶺ニハ欅ハ生ゼズ暖國ノ中モ山ノ高低ト方向トニ由テ材質ニ差ヒアリ一ノ山林ニ生スル欅モ東南ノ向ニ生ズル材ハ木理堅硬ニシテ西北ノ向ニ生スル材ハ木質稍劣レリ古書ニ欅ニ三種アリ真欅（マケヤキ）石欅（イシケヤキ）槻欅（ツキケヤキ）其材質ニ小異アリト今各地所産ノ材ヲ験スルニ材色紅紫色ヲ帯ルモノアリ（古工真欅ト稱スルモノハ今俗ニ赤欅ト云フ）

又青黄色ヲ帯ルモノアリ古ヘ槻欅ト称スルモノ今俗ニ青欅ト云フ槻ト称スルモノハ一種別ニアリ赤欅ハ外皮粗錯ナレドモ材質堅実ナリ青欅ハ外皮軟滑ニシテ材質稍柔靭ナリ尤赤欅ニ比スレバ生長早シト云フ

欅材ハ古来四國西國處々ヨリ産出シ就中日向ノ産ヲ以テ最良トセリ現今ニ至テ磐城両野常陸武蔵相模伊豆駿河遠江尾張紀伊ノ産ヲ以テ多ク府下ニ販賣ス該樹大ナルモノハ長百五六十尺合圍二三十尺ノ樹アリト聞クドモ元ヨリ稀有ノ材ナレバ嘗ニ巨幹盤根ヲ奇トスルノミニシテ材用ヲ爲ハ八十年ヨリ二百五十年ノ樹ヲ以テ材用ヲ爲スノ度トス欅ハ松杉ニ比スレバ生育遅緩ニシテ実生ヨリ十年ニシテ三四尺ノ長サニナリ十五年ニシテ七八尺ヨリ十尺土地ニ由テ小差アレドモ此間生長最遅シ三十五六年ヨリ生長漸ク早ク土地ニヨリ四十年ヨリ五十年ニ至リ初メテ材用ヲ爲スト雖モ未ダ伐採ノ期ト云フ可ラズ五十年ニシテ凡周圍二尺五寸七十五年ニシテ

周三尺ヨリ四尺百年ニシテ周五尺ヨリ六尺百五十年ニシテ周凡八尺二百年ヨリ二百五十年ノ樹周十尺以上十五六尺ニ至ル以上數十本點撿シタル平均ノ數ナレバ産地ニ由テ差異アルベシ欅ハ今日迄ハ格別注意セズシテ自然生ノ樹ヲ以テ需用ニ供シダレドモ今日以往ハ人々能注意シテ仕立ザレバ欅ノ良材獲難キニ至ラン欅ハ山陰ニモ山陽ニモ生ズレドモ濕地ニ生シタル樹ハ生育ハ稍早ケレドモ材質堅硬ナラザルノミナラズ入皮等アリテ甚キハ入皮ヲ點

々林中ニ交エ蟲蝕木ノ如キ材ヲ生ズル事アリ一山ノ中ニテモ山陰ニ生ジタル樹ハ材質順良ナレバ家具雜具等ノ用ニ供スルニハ可ナレドモ堅硬ヲ要スル材ヲ獲ルニハ山陽ニ生ジダル樹ヲ可トス欅ニ適スル地ハ眞土ノ肥地高燥ノ眞土眞土ノ少シ濕リアル地砂交リノ肥土清凉ノ深土此他腴地ノ深土ナレバ何レノ地ニモ生スレドモ陶土質ニシテ海面ノ地ヲ最良トス此樹ハ高山ノ巓及ビ寒地ニ生セズ山腹巘間及ビ平

地ノ暖ニシテ地ノ深キ所ヲ以テ適セリトス

欅ノ播種及ヒ收穫

欅ハ二十年ヲ經レバ実ヲ結ベドモ苗木ヲ作ルニハ七八十年ヨリ二百年ノ無病ニ生長シタル樹ノ実ヲ採收シテ下種スベシ欅ハ五月花ヲ開キ十月熟シテ落ツ之ヲ採收シテ二三月乾シ風氣ノ流通スル濕氣ナキ所ニ貯ヘ置キ翼年三月下旬（春ノ彼岸ノ頃）下種スベシ種ヲ播クニハ先ツ真土或ハ砂交ノ地ヲ能ク破碎シ芥肥敗落葉ノ腐リタルモノヲ能ク扣交テ地ヲ平坦ニシ其上ニ直ニ散蒔ニシテ篩ニテ細土ヲ五六分掩ヒ藁ヲ其上ニ置クベシ又藁ノ上ニ四五尺毎ニ竹ヲ置クモヨシ風雨ニ種子ノ流散セザル爲ナリ蒔タル床ノ週遭ニハ粗ナル垣ヲ結ヒ酷暑ノ時ニ至ラバ垣ノ上ニ遮陽ヲ爲シ日中ニハ覆ヒ日没ヨリ日出迄ハ遮陽ヲ除クベシ灌水ハ土地ニ由テ施スベシ乾燥スル地ナレバ毎夕施シ濕リアル地ナラバ酷日久

シクシテ乾タル時ニ施セバ可ナリ三年目
迄ハ護霜ヲ為スベシ四年目ヨリ五年目ニ
至ラバ山林ヘ移植スベシ

欅苗木ノ栽植

欅ノ種子ハ小粒ニシテ風ニ飄散シ易ク又
小鳥（鶍菊戴ノ類）ノ好テ啄ムモノナレバ其啄餘
ノ散布シタルモノ雪霜ノ害ヲ免レテ草間
落葉ノ下ニアリテ濕氣モ適宜ナルモノ翼
年春陽ノ時ヲ得テ山野ニ自然生スルナリ
此自然生ノ嫩木ヲ助ケテ其儘其所ニ成木
セシムル歟又ハ之ヲ抜採シテ欅ニ適スル
地エ移植スベシ欅ノ嫩木一尺ヨリ二尺位
迄ノモノハ根ヲ毀傷セスシテ抜採スル易
ケレドモ三尺以上ノ苗木ハ相應ニ根モ蔓
リテ掘リ採ルニ根ヲ傷ムルモノナレバ三尺以
上ノ樹ハ勉テ其生タル所ニ成木セシメ一
尺ヨリ二尺位ノ苗木ヲ移植スルヲ可トス
凡ベテ苗木ハ移植ノ後二三年ハ其週遭ノ
桎梏ニナル雑木乱△

草ヲ刈リ竹木ヲコステ添木トナスベシ獸類ノ荒ス事烈風ニ觸レテ轉覆セヌ様ニ注意スベシ櫸ハ枝葉箒状ニ上ニ聳ル樹ナレバ直材ヲ得ルニハ樹ト樹トノ間ヲ狹クシテ互ニ相維持スレバ横枝蔓ラスシテ須直ノ材トナルヘシ一二本ヅツ所々ニ生スル樹ハ多クハ枝四方ヘ自儘ニ廣リ直長ナラス曲リ材ヲ要スルニハ山脊或ハ懸崖等ニ植テ可ナリ又苗木ヲ植ルニ諸木ヲ伐採シタル伐株ノ際ヘ植ルモ可ナリ伐株ハ漸々ニ腐レテ肥養ニナルモノナリ

櫸ヲ山林ニ仕立ル事

櫸ノ根ハ深ク土中ニ入リ八方ニ廣リ地ヲ固ク握テ風ニ倒レヌ樣ニ成ルモノナレドモ最初ニ十年位迄ノ内ハ風ノ烈キ土地ニテハ枝ヲ折リ又ハ樹ヲ吹倒ス事アリ尤其山林ノ向ニ由ルモノナレバ同一ニハ仕立難ケレトモ先ヅ初メハ六尺ヨリ九尺ノ距離ニ植ヘテ烈風ニ倒レス惣体ニテ扶持スル樣ニスベシ又諸木交雜ノ山林ナラバ間ヘ植ヘ又ハ雜木ヲ伐リ其伐株ノ際ヘ植ヘ餘ノ雜木ヲ存シテ櫸ノ成長スル迄ノ助ケトナシ櫸蕃茂スルニ至ラハ他木ヲ伐リ遂ニ全ク櫸ノ林トナル樣ニ仕立ベシ植付テヨ

リ十年二十年ヲ経テ稠密過ル樣ニナラバ間ヲ一通疎伐スルヲ宜トス（樹ノ間元九尺ノモノナラバ十八尺ツヽノ間ニナル）又年ヲ経テ密接セバ又疎伐スベシ七十五年ヨリ八十年ニ至レバ材用ヲ為ス故ニ「ジヤルジナール」（撰伐ノ法）ノ法ヲ行フ歟又「クーブペリヲジツク」ノ法（一區ヲ伐ル法）ヲ行ヒ續テ再植法ヲ行ヘバ遂ニ櫸ノ年齡ノ揃タル山林成ルニ至ルベシ該樹ハ歐人モ暹羅産ノ「チーキ」材ニ亞テ造船ニ適スル最良ノ材ナリト云エリ故ニ前ニ云フ赤櫸ヲ蓄生セシムルヲ有用

多クシトス又曲リ材ヲ作ル數法アリ十年ヨ
リ二十年位ノ樹エ添木ヲ以テ揉メ或ハ技
ト枝トヲ結ヒ又ハ綱ヲ以テ樹幹ヲ揉メル
仕方アレドモ直材ヲ仕立ル中ニ自然ニ曲
リ材モ成テ又山ノ斜面崖等ニ生ズル樹ハ
多クハ樹幹直長ナラズ曲リ易キモノナレ
バ曲材ヲ作ル法ハ施ザズシテモ曲材ハ獲
ラルベシ

卅13十一年五月廿九日

槻　ツキ　江濃郡志

ツキ　ツキケヤキ　ツキノキ　ナタクマ [illegible]

[illegible]國曰欅ノ一種ニシテツキケヤキト呼フ者ノナリ一説ニ山毛欅（ぶな）
正字通 トス [illegible]
木理 [illegible] ニシテ [illegible] 材 一名ツキゲヤキ
ヲツキノキト訓ス〇江濃郡志曰槻角堅而勁ク 和名抄 [illegible]
葉 [illegible] 人家 [illegible] 多ク植之
[illegible]
（大和本草）　ツキケヤキ
槻トモス [illegible] テツキト訓ス又江濃郡志ニ之ヲ [illegible]
又山毛欅 正字通ニ云葉トモ云フ葉ハ欅ニ似テ毛アリ秋
ニ葉ノ色 [illegible] ナリ其ノ木理細ニシテ白ク欅ヨリ柔
ナリ

愛知縣博覧會列品

出品人　十八ツ町　伊藤源三郎

槻杢板子壱挺　産信濃國西筑摩郡地駒ヶ根村字立町

長壱丈三尺五寸

幅六尺

厚五寸

代價金壱千圓

仝人出品

槻杢板子壱挺　仝

長壱丈三尺五寸

幅五尺　厚四寸五分

代價六百七拾五円

古

右ハ弓ノ野ニ用ユ椛弓トモ云フ四キノ葉ハ干テ物ク

ニカ動ニ用ユ樺ノ葉ハ用見ミ云フ

槻杢板子壱挺 仝所産

長 壱丈三尺五寸

幅 三尺弐寸

厚 三寸五分

代價金百八拾圓

明治十三年五月 田中芳男

ウバメガシ

常緑木ニシテ葉形楕円疎鋸歯アリ辺縁少ク背ニ巻ク四月ノ末ニ嫩枝ニ雄花数条垂レ枝頭葉腋雌花ヲ開ク雌蕋二柱又三柱アリ

雄花ノ形猫尾ノ如ク長サ一寸許細花十八九ヲ着ク萼ナク五瓣黄緑色雄蕋五茎長出黄葯黄粉ヲ飛ハス

乙亥 五月 四日

ブナノキ　山毛欅

ブニナグリ　日光

ソバグルミ

ハキユス、シルハチカ　羅甸　ベウケボーム　荷蘭

○ブナノキハ殻斗科ノ喬木ニシテ林氏第二十一綱第八目ニ屬ス「ゲメーネブーキ」尋常ブナノ義ナリハ色ノ赤白ニ從テ三種ニ分ツ　此樹百尺ノ高サヨリ百四十尺ニ及フ材ハ薪トナシテ良ナリ又鏇匠剜工造車匠ノ用ニ供ス　此灰剥多亜斯ヲ出スコト多シ　実ハ食用トシ味佳シ又豕及白露國鶏

ニ喂シテ佳ナリ ハンウェイキ説

○ブナノキハ羅甸「ハキユス」ト稱ス是希臘語ヨリ出ツ又「ハグギ」以大利「ヘトニ」佛蘭西「ハイカ」又「ハイヤ」西班牙「ビーチ」或ハ「ビーチツリ」英吉利「ビユクハウム」或ハ「ビユセ」獨逸「ボヲク」瑞典ト稱ス 全歐羅巴之ヲ産セサルノ地ナク北部ニハ大林モアリ 英佛ニハ獨逸荷蘭ヨリハ多シトス 瑞士國ハ地ノ高低ニ関セス産スレ氏「アルペニ」山頂又他ノ山巓ニハ絶テ観ズト「ハルレル」氏云ヘリ

○此樹ハ喬木ニシテ幹太ク枝繁茂シ其状擴大ノ圓冠様ヲナスコ有リ 外皮平ニシテ灰色、材ハ白クシテ堅シ葉ノ状白楊葉ニ稍似タレ氏之ニ比スレハ柄短ク形圓シ若シ此葉光滑ト小クシテ暗緑色ナルコ無キ片ハ恐クハ楡葉ト混スルコアラン 此樹ノ芽、鱗様ヲナシ或一拇指ノ長サニシテ端尖リ且硬固ニシテ之ヲ刷牙ト為スヘキ程ナリ 故ニ冬月ト雖氏他樹ト能ク辨別スベシ 其葉出ル頃猫花モ亦出テ形小毬ノ如クシテ長梗ニ垂レ小萼ニ因テ相連リ各八雄或ハ十

雄ヲ着ク　実硬ハ揺花ト離レ刷毛ノ如ク出テ
卵様ニシテ尖リタル実ニ変ス此実材質ノ如ク
硬ク外面刺アリテ粗糙ナリ熟シテソノ尖四裂
シ恰モ花状ノ如クシテ中心ニ三稜ノ子ヲ含ム
○此樹ノ主用ハ此材ヲ以薪トナス又焼テ剥篤亜
斯ヲ製ス「ハルレル」名ノ人ノ説ニ瑞典人瑞士人ハ殆
シト此材ノミニテ之ヲ製スト云　此材ノ用広
シ葉ハ稍収斂シ清涼ノ効アリ外貼シテ焮衝ヲ
治ス

○実ハ秋熟ス食フベシ味甘クメ脂ヲ含ム仁ア
リ然モ或説ニ之ヲ過食スレハ酔フヿアリト又
一説ニハ人畜トモ之ヲ食ヘハ熱病或ハ他病ヲ
発スベシト云　但野猪山鼠等ハ多ク之ヲ食フ
鶏ハ之ヲ食シテ能ク肥ユ或土民ハ脂ヲ搾リ
テ油若ハ酪ノ代トス　林娜斯本草
○オウデマン和蘭本草云此喬木ハ其幹多クハ
直ニシテ光滑灰色ナリ芽ハ毛茸ナク光沢アリ
テ細尖ナリ葉ハ柄アリテ卵円且光アリ其実ハ
褐色ニシテ三稜アリ　彼五月花ヲ開ク雄花雌
花彼此ノ部ニ在テ両全花ハ絶テ無シ　雄花ハ

長梗ヲ抽キ状圓クシテ枝ノ側ニ着シ小描花キ
ヲキ各自鐘状ニシテ花辧六裂ス八ヨリ十二ノ
雄蘂アリ又雌花ハ枝頂ニ在テ一二三花相攅リ
三四ノ苞アリテ之ヲ包ム此苞ヲ除ケバソノ花
頭ハレ三稜ノ卵巣アリテ上ハ三柱頭トナル
○此実ノ熟スル間ニ之ヲ包ム苞ハ漸次ニ膨脹
シ内ニ二三ノ仁ヲ含ム外面柔軟ノ小刺ヲ着ク
内ニ三四隔アリテ破綻ス隔内各褐色ノ仁アリ
○ソノ褐色ニシテ光滑ノ仁ハ彼七月ニ熟ス此
頃彼此ノ土地ニ於テ小児ノ菓又豕ノ食物トシ
テ之ヲ収ム　此他此仁ヨリ油ヲ搾ル　此材ハ
多ク薪トナシ或工匠ノ用ニハ他ノ材質ニ優ル
トシ之ヲ賞ス

佛書ハ「ートル」ノ説中抄譯

材ハ其用多シ薪トナスニ宜シ　乾葉ハ羊好テ
之ヲ食フ又藁蒲團ノ詰物トナスベシ　畜類及
栗鼠等此実ヲ甚嗜ム　実ハ榛ノ風味アリ此実
ノ油ハ食用ニ宜シク又久ク貯テ損敗セス故ニ
燈油ニ用テ久ヲ保ツヘシ　此品ヲ食用スルコト已ニ
古シハキユスノ名ハ希臘語ニテ吾カ食スト云ヘル義ナリト

ブナノ実効用利害ノ儀致吟味候処洋説ニモ此実ヲ人民食用ニ致候事モ往々有之小児ノ菓トシ食セシムルヿモ相見エ又鶏白露國鶏豕等ノ畜類ノ食用ニ致ヿモ有之候又此脂ヲ搾候テ油或ハ酪ノ代リニ相用ヒ候ヿモ相見申候佛書ニモ此実ハ榛ノ味アリテ油ハ食用ニ宜ク久ク貯テ損敗セズ燈油ニ用ユ可ク且往昔ヨリ食用致セシヿ等相見エ申候
皇國ニテモ実ハ山民食用致シ候ヿモ有之候以上

出石藩山崎良三ヨリ別紙之通及獻言候処椽油之儀食事ニ相用候而茂不苦品ニ候哉能毒之有無御取調御申越有之度此段及御問合候也

辛未　七月十八日　　民部省

大學南校

御中

尚以別冊ハ御取調濟之上御返却可有之候也

椈実油製造願書

ブナノキ ブンナグリ ノ鄙俗ノ語 椈ノ字ヲ用深山高嶺ニ生ス野州日光山甲州相州ノ諸山中殊ニ夥シク生ス仲秋実ヲ採リ油ヲ製シ是ヲ以燈油トス其光明菜種油ニ勝レリ又食シテ害ナシ胡麻油ノ如キニ非ス椿実油榧実油ノ如シ故ニ油中ニ於テハ上等ノ佳品ナリ然ルニ古椈実ヲ以油ヲ製スルノ法諳者ナク年々山谷ニ落葉ト共ニ埋没シテ土トナル古昔ヨリ其事且テ諳者無ハ遺憾ト云ヘシ今此開化運歩ノ期ニ當リ民冨國饒ノ術日夜撿求之時勢ニ是ノ如キヲ採ラザルハ誠ニ天ノ賜ヲ捨ルカ如シ試ニ椈實一升ヲ以油ヲ製スルニ凡二合ヲ得其清浄無比油ノ性軽クシテ俗ニ揚油ト呼者ニ替テ用レハ味ノ美ト油ノ無毒ハ遥ニ勝レリ我等ノ同志甲相野ノ山嶺ニ攀リ椈木ヲ撿査スルニ其樹甚多シ山間村落ノ農稀ナル民ノ婦児ヲシテ仲秋ヨリ実ヲ採リ集テ製油ニ鬻キ價ニ替テ山居ノ民ト雖𪜈一ノ生産ヲ設テ民冨國饒ノ細経ヲ開クニ近シカ茲ニ於テ

東京大学総合図書館

官ノ費用ヲ仰ス同志協力シテ櫨実製油所ヲ甲
陽ノ地ニ開テ相野両國局ヲ別テ油ヲ製サハ必
國ノ益ヲ得ンコヲ餘ハ六十州内櫨実ヲ産ル所
ニ随テ國ヲ益シ民ヲ利セント欲ス抑願ハ櫨実
油製造ノ儀一手ヲ以テ國々ニ及シ私ニ製造ヲ
禁シ実油共ニ一手進退ノ儀
官許ノ令命ヲ下賜ンコヲ伏テ懇願ス其規則税
法等左ニ記テ以照察ヲ乞フ

明治四辛未年六月

規則

一神前献燈并ニ食用ニモ相成候品故可成丈清浄ニ精製可致事

一櫨実買入方絞り法等附属ノ者進退致候節私欲奸曲ヶ間敷儀無之ハ勿論民ノ辛苦不相成様計可申且油賣捌等安價ニ扱可申事

一税法ハ是迄油ノ税ニ準シ其他ハ一ヶ年製造高ノ内二拾分一ヲ以為高税上納可致候事

一社中ノ者一同ノ了簡ニテ商法掛引等社長ト雖モ堅ク禁之民富國饒ノ基礎トモ相成候様精々心掛可申事

東京大学総合図書館

右之段格別之蒙 御慈愛何卒御登庸相成候
様偏奉願候以上

願人 出石藩 山崎良三 下

差添 静岡藩 笹田右十郎 下

ブナ培養等之方法

一ブナハ海濱瀬水ヨリ三十間程距リ燥濕ヲ嫌ハス白砂之處ニ天然ニ生植ス風砂ヲ飛ハセブナ之上ニ蒙ラシムル處ニヨシ

真土ノ處ニ生セシハ未ダ見ザル處ナリ

一ブナノ未タ芽ヲ生セサル時節ニ當リ小便及ヒ肥ニナルベキ塵埃ヲ施セハヨシ

一ブナ二月比芽ヲ生ス夏ノ土用半ヲ過キ一両日天氣之晴續クヲ計リ芟ル初メ海濱ニ並ベテ干ス夫ヨリ末ヲ結ヒ本ヲサギ本ヲ上ニ向ケ置キ急ニ干ルヲ要ス

一ブナヲ席ニ織テハ一昼夜モ木盤ホニ入レ湯ニ漫シ柔ニナルヲハカリ湯

ヨリ上ケワラ莚ホニテ包ミ乾カス様ニシテ織ルハヨシ
右土人ニ尋問スル處如斯候也

酒田縣

厚浮皮（コルク）剥製法

厚浮皮ハ又採木トモ水浮木トモ云フ即杭木ナリ此樹皮ハ各種ノ用アレヒ専ラ壜塞ニ用ヰルヲ以テ今ハ殆ト壜塞ノ名トナリ

欧洲ヨリ輸入スル所ハ葡萄牙、伊太里、是斑牙、佛蘭斯ノ南方及ヒ亜弗利加ノ北部ニ産スル常緑葉ノ櫟（クヌギ）ニシテ剥皮ノ用ニ供セリ

我邦ニハ欧洲産ノ如キ常緑櫟ナシト雖モ又櫟樹ノ属中ニ一種ノ樹皮厚クシテ頗ル相似タルアリ其発見ハ鹿島縣下ノ産ヲ以テ嚆矢トスレヒ即チ今博覧會

内田

二八同縣下處ノ外 長崎縣下對馬島處 高知縣下
并ニ静岡縣下ヨリ各樹皮ノ出來アリ皆剥クヿ促ニシテ
剥ニ方法ヲ施スニ非ス 其外静岡縣下ノ處ヲ除テ最上等トスヘシ
此樹名 アベマキ 又 ワタマキ 又 ワタクノキ 等ノ名アリ
今茲ニ滋賀縣下ニ於テ同種ヲ発見スルニヨリ 樹皮出來之ヲ
持來リテ其剥皮法ヲ聞カントス 厚木本邦ニテハ 方法
又 欧州ノ法モ 其樹同シカラズ 之ヲ
知ラズト雖モ 余カ記憶スル所ノ略従ヲ摂ニ示サン剥皮
ノ法ハ 片山直人氏ノ著スル 山林新説
存スベキナレバ 上木ノ後ハ同書ニ就テ其詳ヲ知ルヘシ

厚浮皮（コルク）剥製方壜栓製造法傳習并右苗木購求ノ儀
上申（明治十一年十一月八日田中芳男ヨリ勧農局ヘ建言）
水液、酒、醋、醤油類ヲ壜中ニ容レ其栓ニ厚浮皮ヲ用ヒザレバ必ス貯蓄ノ効ナシ近年厚浮皮ノ用次第ニ相増シ加之葡萄酒麥酒等ノ醸造起ルニ従ヒ厚浮皮ヲ要スルヿ最多ク皆之ヲ外来ニ仰ク因テ其樹ヲ試植セン為メ其嫩苗ヲ購求シ試験場ニ栽ユレトモ素ヨリ僅少ノ員数且ツ其樹数十年ヲ経シ大幹ニ非ザレバ厚浮皮ヲ剥取スルヿ能ハズ然ルニ近年内國ニ於テ一種ノ櫟（クヌギ）ヲ発見ス其皮厚クシテ厚浮皮ノ用ヲナス

べシ既ニ昨年内國博覧會ニハ廣島、長崎、静岡ノ三縣ヨリ其皮ヲ出品ス但シ廣島縣下ハ数年前ヨリ已ニ發見スル所ナレ𪜈皮質未ダ良全ニ至ラズ静岡縣下ノ産ハ始テ剥取ヲ試ミシ者ナレ𪜈其皮質ハ最良好ナリ原来真ノ厚浮木ニテモ第一回ノ皮ハ粗ニシテ用ヲ成サズ第二回（凡十年目）及第三回（凡二十年目）ノ皮ヲ以テ需用ニ供セル者ナレバ初度ノ皮尚十分ナラザルハ當然ノヿナリ因テ樹皮剥法ヲ以テ各地ニ傳ヘ後年ノ良皮ヲ得ントス西洋ニテ厚浮木ヲ産スルノ地ハ葡萄牙　是班牙　佛蘭西　伊太里等ノ南方及ビ亜弗利加洲ノ北部等ニシテ素ヨリ常緑ノ樸樹ナレバ北方ノ寒地ニ産セザルモノナリ今般佛國博覧會出張ノ人員中其任ニ堪ベキ者ヲシテ右樹ノ産地ニ就キ剥皮法并製栓法等ヲ研究セシメバ後年内國ノ樹皮ヲ以テ壜栓等ニ用フルノ道ヲ開クヤ必セリ且又該地ヨリ其苗若干ヲ購求シ帰ラバ亦真ノ厚浮木ヲ移殖繁茂セシムルニ至ラン

東京大学総合図書館

此樹皮ハ内皮ト外皮トアルヲ以テ外皮ノミヲ切リ
決シテ内皮ヲ傷ルヽコト勿レ外皮ヲ剥グニハ一ケ所ヲ残シ
上下ヲ横截ニテ其侭置バ外皮自ラ乾キ縮ミテ
内皮ト分ル然ル後ニ之ヲ剥取スベシ其皮ノ長
短ハ随意ニ之ヲ定ムベシ或ハ云フ一個ヲ残スコトナク
唯内部ノ皮ニ傷ケズ又直ニ之ヲ剥カザレバ害ナシト
右ノ如ク剥メル皮ハ一面ノ皮ハ堅粗ニシテナカノ用ヲナサズ
唯船中ノ非常ニ備ル浮錢ノ用ニ充ルノミ乍併
之ヲ（空中ニ乾シ）水ニ浸スコト久シキノ後取出シ延バシ乾セバ居住
最上等ナリ所用ニ供スルコヲ得ベシト其剥取ノ後ケ

八九年加之十年ニシテ再ヒ剥皮スル事前法ノ如クス
之ヲ第二回ノ皮ト云フ前者ニ比スレハ品位劣ル上等ナリ
其後又前ノ如ク年ヲ経テ剥皮ス之ヲ第三回ノ皮ト
云フ其皮最上等ニシテ所用ニ適ス故ニ最初ヨリ凡
三十年位ニ至ラザレハ十全ノ皮ヲ生スル事ナシトス是今
欧洲ノ法ナルヲ以テ我庭園ニ於テ同様ナルヤ否ヲ知ラ
ストイ雖モ先ツ右法ニ従フノ外別ニ擬ス所ナシ尚実
地ニ就テ検究シテ其適当ノ所置アランヲ望ム

明治十年五月 日

田中芳男

樹綿ハ楊柳科ノ木ニシテデロヤナキ又エゾヤナキト唱ヘ遠クハ北海
道近クハ武蔵青梅小河内邊自生多ク東京近傍ニテハ青山邊ニ一株
ノ大樹有之レハ右ハ絮ニシテ柳絮ト同一之ヲ以糸并綿ヲ製シ候事
既ニ前人ノ発明モ有之格別有益ノ者ニ者無之假令糸ニ製シ候ト
モ木綿ヲ以混交セサレバ糸トナシ難ク又之ヲ紡績シテ布ニ製スルトモ
強靭ノ品ニ無之候
蕁麻者苧麻ト同科目ニシテ糸并織物ニ製スル事是亦前人ノ
発明モ有之候得共多分ニ培養候得者御國益ノ一端ニモ可相成哉
ニ被存候

内務省

ワタノキ

東京青山墓地ニ一ノ大樹アリ直立セリ
俗ニ ワタノキ トモ称ス 数年前ヨリ大ニ喝
称セラレ此枝ヲ挿シ久シク繁殖セシメタル人
アリ以テ綿花樹ト称シ綿花同様ノ効アリ
ト称スルニ至レハ猶蘿藦ノ 葉ヲ以テ真
ノ木綿ト思フカ如シ皆綿花ニ非ス其ノ用ヲ
ナスト然モ到底織緯脆弱ナレハ糸ヲ
紡クヿ能ハス唯中入綿ニ換ヘシ
按ニ此樹ハ デロノキ 一名 ドロヤナギ ニシテ

従来其材ノ脆キヲ以テ泥ヲ以テ擯斥シテ作
サヽレシガ近年燐寸ノ材ニ於テ「ドロヤナギ」
ヲ第一トスルニ至リ忽チ[illegible]ノ需用ヲ
要スルニ至リ忽チ缺乏ヲ訴ヘ其材ノ需用ニ
足ラザレバ該業ノ為メ大ニ妨ゲナランコトヲ云フ
米国ニ於テ Cotton wood ト称スルモ亦
此類ニシテ其名我ワタ木ト符合セリ

明治十三年十月六日　田中芳男記

秋田縣産カドロ及ヤスモトヤナギノ説

カドロハ鹿角郡十和田山中ニ産シ「ヤスモトヤナギ」柳安本ハ仙北郡ニ多シ「ヤスモトヤナギ」ハ一名大葉ヤナギト称シ又單ニ「ドロ」トモ云フ聞ク所ニ據レバ「カドロ」ハ實ノ大サ「ヤスモトヤナギ」ニ比スレバ稍ヤ大ナルガ如ク又綿ヲ収ムルノ時期ハ九月中ニシテ「ヤスモトヤナギ」ヨリ一月許遅ク又綿ヲ生スル株ト生セザル株トアリト案スルニ此二者ハ只産地ノ異ナルニ由リ結實ノ期ニ遅速アリ又名ヲ異ニスルノミニシテ元同一種ナルベシ綿ヲ生セザル株ハ蓋シ雄株ナラン其群生ノモノヲ遠見スルニ葉背白クシテ日ニ映スル時ハ恰モ盛ニ白花ヲ着ルカ如シ樹ノ高サハ八九丈囲ハ五尺ニ至ルモノアリ

農商務省

東京大学総合図書館

右松原新之助氏ヨリ田中芳男氏ヘ寄葉状ノ写

明治十七年十一月十五日写

表面 ヤスモトヤナギ

裏面

秋田縣仙北郡神宮寺村産

十七年八月九日 収

橡抱ノ種類

天蚕會社員下村廣畝曰信州ニテハ橡ニ四種アリ即 サバ ヘウメンバ コバ ウラジロ 但シ此ウラジロハ葉大ク裏白シ甚数ニ至リテハ甚タ老シ且此樹ハ皮厚シ（按ワタナラ同物カ）下総ニテハサバ ヘウメンバ ノ二種アルノミ

又抱ハ信州ニ四種アリ コナラ オホバナラ コバナラ ミヅナラ 但シ此ミヅナラハコナラトハ別種ニシテ深山ニアリ大木トナルモノナリ

原来山蚕ヲ養フニ葉ノ大ナルヲ以テスレバ蘭

博物局

○長崎縣下　綿槲（和ビラン）説

長崎縣下対馬島産（ワタナラ）苗和　長崎市中ノ
威ハ寺ニアル（ビラン）ノ苗ヲ同縣織田賢司ヨリ得帰
リ大島圭介氏ノ庭ニ植ヘ由

右ヲ点検ノ為メ舘野ヲ以テ其形状ヲ質シテ
其葉ヲ得タリ　但シ綿槲ハ三十本アリ（ビラン）ハ僅
ニ廿ノ由右ハ一年生ノ苗ニテ来冬ニナラバ綿槲ハ数本
献納スベキトノコトナリ

葉形ハ墨摺トシテ次ヘ出ス

大キク葉小ナレバ繭小ニ然レ𪜈亦蠶ノ樹ニ
着クルノ多少ニ因テ繭ニ大小ヲ生スルナリ
ト云フ

明治十二年八月廿二日　田中芳男記

栲木樹葉

備前ヨリ勧農局ヘ差出ス所

明治十一年五月二十八日印ス

深緑光滑

面

粉白色

背

ワタナラ

表

裏

ビウン

表

裏

同上

表

裏

カハヤナギ一種小葉ノ者　コメヤナギ　新称　芳君

林氏第廿二綱第二目
自然科目　葇荑科

駿州冨士ノ麓須走ヨリ五十四丁目原野ニ一株ノ水楊ヲ検出ス幹高サ三四尺根ヨリ六七幹ヲ立テ小枝ヲ分テリ葉ノ長サ四五分濶サ分半ニ過キス其最小ナル者ハ果粒ノ如シ面深緑背白色ナルハ尋常品ニ異ナラズ唯全形ノ小ナルヲ奇トスルノミ素ヨリ一種ノ者ニアラサルべシ

平田蔵書

東京大学総合図書館

甲三

イハヤナギ

三月ノ中脘新葉ト共ニ花ヲ開ク雌雄別株 五三 花形

図ヲ累ヌ 云 雄ナル者ハ穂ノ長一寸許細小花数百ヲ着ク

無弁 毎花弁ナシ 一片ノ苞アリ中央ヨリ二椎蕊ヲ双出ス共ニ約膜

黄褐黄粉ヲ吐ク雌ナル者ハ穂ノ長サ五六分 灰白毛アリ 数百

花ヲ簇リ着ス共ニ無弁 ナシ 一片ノ苞アリ形按針状

ニ黒色ノ毛茸ヲ着ク一雌蕊細ク子房大サ粟粒ヨリモ小

形卵形卵円 外面ニ繊細ノ軟毛ヲ着ス種子熟スルニ従ヒ

穂長サ弐寸以上ニ至ル子房モ又随テ成長シテ黍粒

博覧会事務局

明治十一年八月八日

小野職愨

東京大学総合図書館

コレモ大ナリ之ヲ擘キ内部ヲ検スレハ種子五六箇アリ
擘テ以テ之ヲ検ス
又一種雄花ハ数似タル花軸ヲ抽出スルコト一様ノ長サ四寸
許毎花一片ノ苞アリ内ニ二雄蕊ヲ有ス子房細長ニシテ
頭尖リ稍太クリ大サ黍粒ノ如ク外面毛茸ナリ内部
ニ胚ヲ微サノ如クナリ雌ハ一種子ヲ収ム 穀葉変セざるべし
又一種変セシ雄花ハ数似タル雄花ヲ抽出スルコト長ク
正面ノ毛茸アリ其間数多ノ花ヲ擁スル毛茸ノ一片ノ
苞アリ内ニ一雄蕊ヲ収ム花糸長ク出テ前腰葯ヲ
黄粉ヲ吐ク
眼睛 雄蕊ノ杯子多様ノ者ヲ知ルベシ

[illegible]

大阪堂島楊ノ説

大阪堂島ノ河岸ニ大ナル楊多シ樹幹ノ大サハ二囲モ
アルベキト覚ユ右ハ大阪ヨリ実視スルノミニテ未タ精研セ
サルヲ以テ三角有儀氏ニ托シテ其枝ヲ取寄セタリ
明治十年四月十三日博物局天産課植物掛ニ於テ挿シ置ク

四月十三日

田中芳男記

本草圖譜ニノブノキノ圖ヲ載セ次ノ說アリ

櫰香　カハグルミ　ヤス　松前　ノグルミ　サハグルミ　尾
チベルケプ　エゾ　フラツクセニウース　蘭人シーボルド

兜櫨樹　救荒本草

葉ノ形胡桃ニ似テ小ク春葉ノ間ニ花ヲ生ス形胡桃ノ花ノ如ク長大ニシテ毬ヲ結ブ卩樅ノ毬ニ似テ圓ク大和本草ニ賤民以テ沈香ニ代フト云ヘリ　集解ニ葉小薊ニ似タリト云　根又枸杞ニ似タリト云テ合セ考フレバノグルミヲ充ルヲ近シトス

島根縣勸業月報抜鈔

ハブ樹皮ノ說　日野郡足立廣太郎報

日野郡福岡村字白根好重ヨリ本郡「ハブ」樹皮賣買ノ景況ヲ聞クニ巨額ノ金高ナルヲ以テ爰ニ報ス山中村落ノ殖産家ニ注意ヲ仰ントス
本郡中村々山林雜木自然生スル「ハブ」ト言フ樹稍繁ルモノノ根皮ヲ剝取日光ニテ能ク乾シ目量ハ九貫目ヲ一束トシテ會見郡米子及ヒ其近傍ノ村々或ハ雲州地方ノ仲買人ニ賣却シ專ラ漁網ノ染料ニ供セリ而シテ其賣買セシ處ノ代價ハ千貫目ニ付六貫

救荒啓蒙　ノグルミ　ノシノキ　兜櫨樹　即ノブノキ也

草稿用紙

目ニ付金壹円乃至貳円位ニシテ一ケ年ノ消費高ハ
目量大凡ソ七万五千貫目内外トス此ノ量ハ日野會
見汗入ノ三郡ノ産出ニシテ此ノ内五万貫目内外ハ日
野郡ノ産出ニ関ル此代金二千円内外ナリ（右貫目ニ付平均四拾銭替）
実ニ一片ノ木皮ニシテ村民農間餘業ノ数ヲ求ル
ニ過スト雖モ斯ノ如ク其ノ大ナリ止ヲ望サラレヤ地方
ノ殖産家タルモノ其レ務メサランヤ

明治十六年十月十六日回ス

サハグルミ　一名カハグルミ

林氏第十九綱七目　　自然分科　胡桃科

Pterocarya sorbifolia S. et Z.

（Juglandaceae）

信州飛州常州野州足尾九蔵峠ニ産スル落葉木ニシテ高サ
數丈大ナル者ハ囲三合抱ニ至ル外皮稍灰白色ヲ帯フ小枝ノ外面黄緑
色ニシテ灰白ノ細点ヲ撒布ス春分後枝頭毎ニ四五枚ノ新葉ヲ展フ
形複鱗状ニシテ毛茸アリ蘇鐵（胡桃）ノ嫩葉ニ類似ス其中心ヨリ三或ハ五ノ葉莢
花ヲ下垂ス

日光鉢石ニテハ外皮ヲ壽光皮ト稱シ材ヲ以テ諸用又諸品ニ造ル（ニ供シ）

博覽會事務局

八年四月四日勧業寮出張所ヨリ来ル花未タ開カズ後日
詳記スベシ

博物館事務局

濾畜於テ字常ハ九十尺自然ニ発及ヒ枝ハ
土佐國幡多郡横浜金山ニ産ス俗ニ花算
柳ト云フ樹ハ葉ハ粘ニ病ヲ熱病ニテ又ハ瘧
ナドシ煩ツタ家ノ門ニ掛ケ又ハ煎服シテ飲メハ忽
チ全愈ハ効有リト云傳フル土ヘニ高知縣御免住生
舘實カ流出シテ其樹ヲ見ルト正シク天ニ産ノ家
卯樹（家卯ハ西洋ニテハ花ノ葉稍モ言ヘ漢方字
ノ人意ホドニ尊ヒセノナリ）ニ相當ナラシハ其樹ヲ傳
四五ノ方ナリ同ノ葉漢ノ肉匠ニテト松ハ欲ヲ
モハ以ハトナスカ胡ハ云ヒ叱匠シテ土ボリトイヒ土
仏ノ多州ニ發行シ在ツテ咲テ熟シ居リシト思
ニシメ下ヲ見ルニヨリ見ルトキヲ

春暖ニ従ヒ愈高キヨリ多ク稀ニ售ル販賣ス、
随テ朝鮮ニモ其價モ以テ頗ル高キハ
之ヲ陳者博物局ニ於テ（細ヅミ）細ピリエス（全ニスナシ）
太キ材ヲ以テ営上ヲ生ス其他ヨリ僅乳頗ル
太樹モ当地清国ヨリ輸出ス枝子ニ相成モ品有之
其他立木ニテモ有之候者凡ソ五尺ノ四位ニ数本
有之候枝子ノ分ニテハ六尺乃至寸巾壱尺、厚サ三寸
ヨリ五寸マデハ該木ノ至ニテ重量設ケ来ルニテハ運送
難ク流天龍川ヨリ出シ時亦ヨリ遠州掛塚ニ運上
ニ十分ハ軽便ニ運送シ若キ年ノ以テ旬ニテ販売
ノ若木ハ是ヨリ載ニ及ヒ材品製造ノ木板等ハ
以テ指揮ニ随テ木炭ニシ長丈三尺以内十分ハ中島

遞送ノ方法ハ亦ハ旨ニテハ困難等無之哉
諸君ニ於テモ此困難ハ實上ヘノ御事ハ果シテ然ラバ
此儀ニ付テハ直チニ至急御傳聞ニテ確ト御伺ノ
上ニテハ實上ニ於テ其年適當ノ要素ニ御示可致候
御取調ノ上猶ニテハ御伺ニ於テ盛大ニ致候
處置有之度此段申進候也

十月十五日　岩山局　藤吉郎

田中芳男様

五陣ノ間等十七六号ハ急速ニ入用ニ付至急御返答也直ニ
追テ本文六尺巾ニ付人字廿五寸ニテ御取計ノ處ハ實上ニ至哉
差出ノ處迄ハ未定ニ付何程ト申ス處迄ハ

針葉闊葉樹ノ名

針葉樹 闊葉樹ト區別スルハ獨逸山林家ノ説ニシテ即チ針葉樹トハ松樅杉ノ類ヲ云ヒ闊葉樹トハ樺櫟楊柳欅栗等ノ類ヲ云フ然ルトキハ針葉樹ト云ハ松柏科ノ外ナラズ闊葉樹トハ松柏科外ノ樹木ヲ云フナリ然ルニ唯細狹ナルト廣闊ナルトノミノ義トスルトキハ本邦ニ松柏科中ニ竹柏 公孫樹アリ羅漢松モ針トハ云ヒガタク羅漢柏モ針トハ云ヒ難シ故ニ此区別ハ松柏科ト他科トヲ二部ニ大區別スルノ名ト認ムルトキハ大ナル不都合ナカルベシ

魯西欧洲ニハ右ニ挙ル竹箱公孫樹等ノ如キ樹ナキ
ニヨリ矛盾ノ患ナシト説モ本邦ニハ右ノ如キモノア
リテ大ニ抵触スルニ至レリ

明治十一年七月せる

田中芳男記

五葉松ノ事　信州飯田岩崎新三郎ヘ問合之返事

一　壱番　五葉松　此松至テ少シ

一　弐番　姫子松　此松沢山有リ

一　三番　宮嶋姫子松　此松少シ

右ハ久方村小野子弁財天辺又ハ平谷(ヒラヤ)浪合(ナミアイ)辺ヨリ木曽山ヘ掛リ
其辺ニハ沢山有之由　野底(ノソコ)入山ニ有之由大木ニハ五
六尺廻リ位壱尺余廻リ成も有り　尤寒気強き土地
生え木ニ候　飯田辺ニテ庭木住ニ致候へ共
本ハなく　上飯田村吉孫兵衛方ニ…
植ニ有之候

明治十一年一月十八日　田中芳男

箱根山ニ松ノナキ話

相州箱根山ノ畑宿ヨリ上ハ更ニ松樹ナシ土地ノ人曰ク
是箱根権現ノ松ヲ厭フニ由ルトゾ按ニ松ハ寒地ニ生ズレドモ
松ハ右ノ如キ寒地ニ適セズト見ユ勿論高山ニハ松ナケレドモ
唯ハヒマツト称スルアリ其幹枝地ニ這ヒ更ニ聳立スルヿ
ナシ人之ヲ移シテ盆玩スルモ尚其形ヲ変スルヿナシ且海ニ近キ
地ハ黒松生ジ海ニ遠キ地ハ赤松生ズ互ニ移セハ其所ヲ換ヘシ
但シ元赤松ヲ黒松ノ如キ卑湿ノ地ニ植ルヿ能ハズ

松花　明治十二年五月下　田中芳男記

五月十日庭中ノアイグロマツヲ検スルニ雌花ハ新芽ノ頂ニ着キ雄花ハ新芽ノ本ニ着ク勿論雌花ノ数ハ二三個乃至三四個ナレ氏雄花ハ多数聚リテ新芽ヲ囲繞シ全芽ノ中央以上ニ延及スルコトアリ

実ハ次年ニ熟スルニハ結実ノ頃ハ枝根ニ着クナリ故ニ実ハ枝ノ本ニ着クトモ云ヘシ雌花ハ枝ノ本ニ着クト云フベカラズ

雄花アル新芽ニ雌花ナク雌花アル新芽ニ雄花ナシト記シ稀ニハ一ノ新芽ニテ本ニ雄花アリ末ニ雌花アルアリ且雄花

明治十二年八月十日　田中芳男記

ハ雌花ニ比スルニ甚数段ノ多キ者ナリ

黒赤二松ノ間アヒクロ。アヒアカ。アルノ説

松ニ黒赤ノ二種アリ黒松ヲ「ヲマツ」ト云ヒ赤松ヲ「メマツ」ト云フ其黒松ハ高燥及卑湿ノ地ニ産シ赤松ハ高燥ノ地ノミニ産ス故ニ卑湿ノ地ニ成長スル者ヲ高燥ニ移シ高燥ノ地ニ成長スル者ヲ卑湿ニ移シテ能ク繁榮スル者アルヲ聞カズ爰ニ東京ノ地質ヲ以テ之レヲ論ズレハ海邊ニ近キ地方本所深川等ノ如キ卑湿ノ土地ニ黒松甚多ク稀ニ赤松アリト雖モ繁茂スル者ヲ見ズ又海邊ニ遠キ地方巣鴨高田等ノ如キ高燥ノ土地ニ赤松黒松極メテ多シ其黒赤二松ニ就テ雌雄ノ別アル者ノ如シト雖モ固ヨリ林娜氏綱目第廿一綱第九目ニ屬スルヲ以テ真ニ雌雄ノ別ナキ

ヲ証スベシ然レ𪜈通常植物ノ如ク両性花ニアラズシテ一株ニ雄花ト雌花トヲ開ク者ナリ和名ニ雌雄ノ別アルハ唯枝及葉ノ細大強弱幹及皮ノ赤黒厚薄ニ因テ其雌雄ヲ別ツニ過キズ又其両間ニ変生スル者アリ之レヲ「アヰグロ。アヰアカ。ト称ス其「アヰグロ」ハ常ニ人ノ知ル所ニシテ「アヰアカ」ハ曽テ人ノ知ラザル所ナリ余窃ニ以為ク「アヰグロ」アツテ「アヰアカ」ナキノ理ヲ信ゼス衆人ノ之レヲ辨識セザルハ蓋園藝家ノ不窮理ニ出スル歟或ハ余ノ不穿鑿ニ失スル歟抑了解シ得ザル所アリ身親ラ其是非ヲ決定スルヿアタハズ然レ𪜈今試ニ「アヰグロ。アヰアカ」ノ変生スル根源ヲ推究スルニ他ナシ其「アヰグロ」ト称スル者ハ即赤松ノ花粉黒松ノ雌蕋ニ合シ結實ノ後種子ヨリ変化スルモノ是ナリ假令バ赤黒両通スル者ト雖𪜈其精力ハ黒松ニ十分スルヲ以テ十中ノ七ハ黒松ニ類似ス又「アヰアカ。ノ如キハ黒松ノ花粉赤松ノ雌蕋ニ通ジ結實ノ後種子ヨリ変生スル者是ナリ假令ハ黒赤双通スルモノト雖𪜈其精力ハ赤松ニ十分スルヲ以テ十中ノ七ハ赤松ニ類似スル者ナルベシ又「アヰクロ。アヰアカ。ノ互ニ交通シテ種子ヨリ変生スル者アリ悉ク其形状ヲ鑑査シ細大之レヲ區別スルニアラザレバ変化変態ノ来由ヲ極ムベカラズ又之レヲ極メント欲スレバ但餘暇ナキヲ恨ムノミ因テ此ニ黒赤二松及アヰグロ。アヰアカ。ノ説ヲ作リ以テ同志ニ示ス乞フ識者ノ垂教アランヿヲ

東京大学総合図書館

モドウ松　モドウハ地名ナリ又[illegible]ニ[illegible]知レズ

此松ハ肥後并北部薩摩堺ノ官林ニアリ但シ幾ヨリ東ノ方ハ大ニシテ西ノ方ハ繖木ナリ　大木ノ方ハ十七八間迄直ク繖木ノ方ハ二三間ナレ氏　新抄ハ五六尺モ隙長セリ此テ幹長ノ速ナルヲ見ヘシ　此地ニ多ケレ氏魁木ノ外ニハ更ニナシ皮ハ松ノ如ク高カラズ又鱗ヲナサズ却テ樟ノ大木ノ皮ニ似タリ　枝ハ上ノ方ニ多ク叢生セズ材ハ赤色ニテ堅靭ニシテ美麗ナリ　　脂多シ　　此レ土塩ノ患ナシ　琉球ノ松ハ状ニ下ヲ物ナラン　伊豆ニ産ス[illegible]箱根ニ至ル[illegible]ノ両傍ニ松ハ樅葉ニ似タリ

此ハ某説[illegible]ニ[illegible]ナリ

琉球ノ松ハ[illegible]里松ト[illegible]又赤松ニ[illegible]一種ノ松ニシテ[illegible]長一寸許

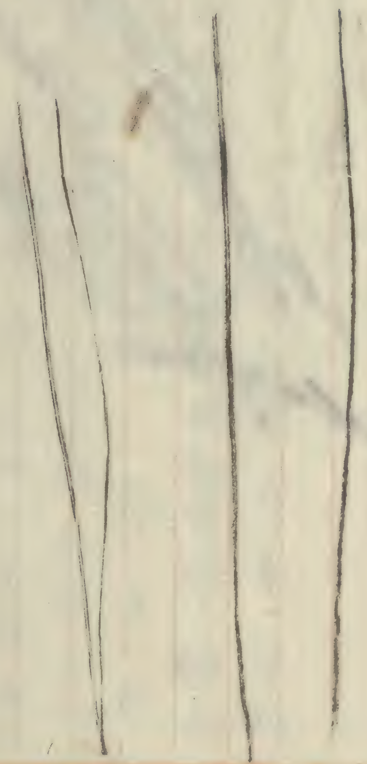
明治十五年四月　小野職愨識

アリシ
田代安定氏曰琉球ノ松ハ其種類ヲ異ニシテ該地ノ良
材タリ樹枝地際ヨリ多クアリ切レバ久キニ保チテ
後モ蘇木ノ生スル如シ甚堅牢ナリ又琉球ノ松ヲ呼称シテ
該松ノ説ハ田代氏ノ著記別ニアリ

明治
十七年二月二十五日

田中芳男記

一万年青図縄ハ京都ヘ注文品到着ノ上一種ニ定メシモノ
嘗テ注文ノ品ノ如キ郭[illegible]ノ為ニ



鹿嶋ノ松

世ニ傳フ常陸國鹿嶋ノ松樹ハ其幹ヲ伐レバ根株ヨリ蘖ヲ生シテ更ニ生長スル事橘梅柳等ニ於ルカ如シト然レ𪜈真ニ然ルヤ否ヤハ未タ詳ナラザリキ

今茲明治十二年四月鰛魚試製ノ命ヲ奉シテ下總國海上郡銚子港ニ寄寓スル事旬餘鹿嶋トハ唯利根ノ一帯水ヲ隔ルノミ因テ此松ノ事ヲ銚子ノ土人ニ問フニ世ニ傳ル説ノ如シ且曰鹿嶋ノ松ハ下總ニ移植スルニ決テ生活セス是レ他ナシ鹿嶋ハ總テ砂地ニシテ其松ハ直根ノミニシテ横根少キガ故ナリト

一日閑ヲ得テ利根川ヲ渡リ鹿嶋郡東下（トウシモ）村ニ至リ
土人ニ此松ノコトヲ問フニ答ヘ前ノ如キアリ或ハ蘖ヲ生スル
コトナシト云者モアリテ一定ナラス又此村ヨリ西北ノ方一里
許ニシテ中新田ト云地アリ此邊ノ松ハ皆蘖ヲ生スト
云者アリ因テ其事実ヲ撿セント欲シ中新田ニ至ル途
中馬夫ニ遇フ之ト語リ行キ且松ノコトヲ問フニ答テ曰
此ヨリ十町許ニシテ路傍ニ砂山アリ此處ノ松ハ蘖
ヲ生ス常ニ屡見ル所ナリト因テ此馬夫ヲ嚮導トシ
テ至リ見ルニ廣平ナル砂丘ニシテ土地ハ皆砂礫ノミナリ
黒松杜松ノ外ハ松露アルノミ他ノ植物更ニナシ鹿嶋

洋ヨリ来ル潮風強ク松樹生長スルコト能ハス高サ漸ク
三四尺枝ハ悉ク地ニ揚ス樹幹矮少トナル故ニ皆根際
ヨリ枝ヲ出ス其幹ヲ伐ル時偶此枝ヲ残セハ後砂礫
風ノ為ニ聚リ根株ノ上ニ堆積シ枝ハ漸々ニ生長シテ
恰モ根株ヨリ蘖ヲ生セシ如ク見ユ此ノ如キモノ數株ア
リ之ヲ誤認シテ蘖ヲ生スルト云ルナリ此ニ於テ世ニ傳フ
ル所ノ訛傳ナルヲ知ルヲ得タリ

鹿嶋郡ハ利根ノ水流ト東海ヨリ来ル潮ト相激シ
テ成ル所ノ砂洲ナリ鹿嶋ノ神社ハ此洲ト大陸トノ境
ニアリ土地瘦テ麥作ニ適セス然レトモ間々作リシ所アリ

東京大学総合図書館

利根ニ沿ヒテ少許水田アリ土人多クハ漁ヲ以テ業トス
又鹿嶋郡ニハ赤松ナシト土人語レリ

日本松栢名 推氏日本々草ヨリ抜萃ス

カウヤマキ	金松	Sciadopitys verticillata.
カウヤウサン漢名 又リウビ	リウキウモミ 和名 ヲランダモミ 和名	Cunninghamia Sinensis.
フジマツ又カラマツ	落葉松	Abies leptolepis, S et Z. (Larix leptolepis, Murr.)
ツガ又トガマツ		Abies Tsuga.
トウモミ	鳳尾松	Abies firma.
ウラジロモミ又シラモミ		Abies homolepis.
サガモミ		Abies bifida.
エゾマツ 即チトウヒ		Abies jezoensis.
トラノオ又トラノオモミ		Abies polita.

アカマツ又メマツ　赤松　*Pinus densiflora.*

ヲマツ又クロマツ　黒松　*Pinus massoniana.*

ゴエウノマツ　*Pinus parviflora.*

ウミマツ　海松　*Pinus koraiensis.*

イトスギ又イトヒバ又シダレヒキ　緑杉　*Thuja pendula.*

コノテガシハ　*Thuja orientalis.*

アスナロ　*Thujopsis dolabrata.*

ヒノキ　*Retinispora obtusa.*

サワラ　*Retinispora pisifera.*

シノブヒバ　*Retinispora squarrosa.*

スギ　杉　*Cryptomeria japonica.*

子ズミサシ　杜松　*Juniperus rigida.*

イブキ　二色柏　*Juniperus chinensis.*

金松

金松ハ高野山上ニ多シ故ニ高野槇トモ云フ由ナレモ素ヨリ葉ハ乾羅漢松ニ似テ其実ナリ故ニ強テ論スレハ松ナリ高野松トモ称スヘキモノナリ又木曾山ノ高野ニ自生スル由藤井先三ノ説ナリ又曰羅漢松ヲクサマキトモ云フ位地ニナシ九州ノ暖地ハ自生スルモ其者ハ花アルニ価貴キハ此是ノ遅キニアリト雖モ又下種シテモ生スルナリ挿シテ生スルコト十中ニ三ノ無シ種子ハ時ニ深ク自然生スル理ニ源ソ角ハ生スルハ容易ナリ又挿ニハ寒中ニナセハ必ス生活ス但シ凍リ揚ル中ハ生セズ故ニ鉢ヘ挿スカ又ハ防霜ノ手当スヘシ挿シ方ハ別ニ方法ナシ宜ノ枝ヲ択ニ二年又三年立ヲ切リ地中ニ挿スモノナリ此挿木ノ実際施シタルハ山林局長武井氏ノ説ナリ

先般申上候通リ梅ガトノ我ハ互ニツガニ當ルモノト存シ脂葉ニテ見ル
様ニ彩色ニ遣リ申上候通リ一覧ニ供シ候也古ヘトガニハ當リツガ
ニ當テ栽之栂尾山ニ栂ト称スル有名ノ品ニテトガニハ非ズ
ツガニテ有之候中ニハ又係ツガトトガトヲ往々混同シ来リシハ
筆者ノ考ニ一応探索候先般来ニテ係トガ及其ツガ次第ニ御座候
コレヨリ以後合ノ際トガノ脂葉ニテ古来取扱ヒシ係トガナリテ
更ニ其脂葉ヲ彩色ニ及ヒ武田ヨリ後図面ヲ以テトガノ木口ヲ
彩色ヨリ其ツガニ有之候ハ是レニテ可成トガト共ニ彩色致シ
今次ニ　トガトツガトノ区別ヲ挙グ

○トガ　葉杜松又トウヒノ如クシテ太ク甚硬ク四稜ヘトナシ

十五年二月十八日

田中芳男

枝の周囲に密着して四方に離れて大小刺戟をそなふ
其跡ハ金松に似たり
バラ 寫生本云　ハリモミ 見光本云

○ツガ 葉樅に似て葉に扁くして末鈍き両尖をなし
大小ニ葉交りて平面に着く其跡羅漢松に
似て最小く卵形をなして四方ニ離れて開きたり

右之通御伺申上候也

六月　田中芳男

山本章夫様

返る書翰ニ而謹て申候仕ニ付梅尾産トガの木一條ニ付
先達て腊葉御廻ニ相成候處兼てトガツガの差別巨細ニ示し
被下候得共近頃覧仕候ニ付我等兼て疑団
有之候處此度宗鑒之説ニて論し候事ニ相成候
候處之間合ニ仕候愚考共左ニ記し御高覧ニ
一 梅尾山ニ産しトガハ返る腊葉共出候木の枝ニ相違
無之候得共最早本枝取寄セ候ニ右両京并丹波等
ニてトガと称する品何も右腊葉の木枝ニ而し
儀并トガと呼来候木の葉ニ右の品ニ相違無之候右の

外にトガと称する物無之候

一 山宗にてツガの形状西京のトガの形状と少しく違ひ
不申候

一 山宗のトガの形状のもの西京近山に一向産し
不申バラ ハリモミ 等の名あるも形と相分全く西京
花戸にてバラモミと唱ふ品とは遠きもの也

一 僕此父より承りしにトガとツガとハ至つて似寄たる
品なれバ葉を以てハ殆ど弁し難く木状に至つてハ
各異なる所ありしと而巳其異なる所以ハ兼て不申

一 家蔵臘葉の内にトガの葉とツガの葉各一枚を蔵せり
トガの方ハ葉尖の岐至て小さく葉背月平らかにして反巻
せず下札に曰く木理細密春芽を生ぜずツガの方ハ葉
尖の岐明らかにして矢筈の如く葉背両辺より少しく
反巻の気味あり下札に曰く木理疎潤夏に至り芽を生ずと
葉ハ共に然葉弁んじ擬ふ類あるものあり

一 大和本草トガ葉ハモミの如く小にして細かなり葉両方
にわかれてモミの如し樅モミにあらず皆葉上に向へり
是ハ上に向はずして葉短く枝に有り葉のさきわれあり
うらに又葉あり大木なり板にしてモミの木理の
如し一種葉の鋒わかれず葉短小枝ニ在るなり

栂とある文トガハ西京にてトガと称するものにして
栂尾山に一物あり
一 大和本草紀聞トガ 漢名未詳 モミの類 樅にモミに
よく似たり木理やや粗なるがモミと異なり 又別にツガと云
ものあり是もモミの類なり
一 章夫栞にトガツガの二名あり此文も二品なる様説置かれたれ
ど其弁別確ならず是積年疑団の不解なりしに
なり因て詳にせざるに此二名全く一物にして土地によりて
名を異にするものの事なるべし都字漢音トにして
呉音ツなり 杜字漢音トにして呉音ヅなり

通字漢音トウにして呉音ツウなり 和名にても
トナガイ又ツナガイと云 ツハドリ又トハドリと云 以上
諸名を以て證すべし
一 新井白石東雅樅の条下に是等の類に古はトガ
といひ今按にツガと云ものなり 万葉集に樛をよみ
都賀ともも刀賀ともしるして読てトガと云
ことあり 仙覚抄に樛の字或本にツゲノ木とよむ
玉篇に下曲ハ樛といへり之にて読てトガノキと云へ
トガといふ木の曲れるを云詞なり トと云ハヒトなり カと云ハ
マカレル義なりと見へたり 即今ツガといふハ其語の

東京大学総合図書館

転せしなり樛字讀てトガと云か如きも亦我國の
方言なり
業と東京のツガハ即古のトガにして西京にして
トガと云ハ古名の存せるものか

一 摂州池田の花戸ニ尋しに池田にてはツガと称せるよし
なりしと云ふ

一 下京一木匠木材を売る所指つとの方ハ年来懇意
なるゆゑ此度トガツガの弁別を問合せしに木匠答て云
当所にて所指つとの何れもトガなりツガと云ものは
なし 但し右トガの材ヲ見て美濃尾張以東の
人ハ好きツガなりなど云ふよしにて方角にかゝりて関東より
其の方ハ能くトガを見てツガと仰せらるゝ是等近江
の人ハ何れもトガと申する園にして名を異にするもの
なり

古義說を以て考ふれハ強ち一物にて存在伏す高覧を
希ふ

九月廿八日 山本章夫

田中芳男様

過刻御質問ノトガ、ツガ、ノ説左ニ辨スルカ如シ

トガ　栂　登加多識篇

ツガ　トツ青通別物ニ非ス

トガモミ

ツガモミ　バラモミ　莘モミノ字ヲ略シテ呼ヨリ二品相混スルニ至レリ

尚之ヲ細別スレハ

トガ　松栢科　ツガ　栂　*Abies tsga.*

諸國山中多ク之ヲ產ス葉ハ樅ニ粗似テ短小細柔ナリツノ頂岐ヲナス其実ハ短小鱗果ノ毬ナ

博覧會事務局

リ此類（材）色ニ因テ「アカツガ」ト「シロツガ」ノ二種ノ
別アリ又一種其葉尚小ナルモノヲ「コメツガ」ト
云

ツガモミ　トガモミ　濃州　クロマツ　信州又尾州水野定光寺等
イラモミ　木曽奈良井阿寺澤等ニアリ　バラモミ　其葉尖利ナルヲ以テ此名アリ

トガ、ツガ、バラ、等ノ名ヲ喚モノハ山民モミノ
字ヲ略シテノ呼ヨリ混淆シ諸鞭家ヲシテ労志
セシム

ヤノハモミ

Abies polita. ミクエルニ所挙ノ和名ハトラノヲモミトアレドモ何ヤラ他書ニテ図ヲ見シヿアリ是ナリ其書ハ忘ル
Pinus Abies Th. 此樹ニ栂ノ字ヲ用ルハ非ナリ

木曽諸山又西濃（濃ト勢トノ堺ニ笠ヶ嶽ト云アリ此山ニアリ）
等ニ産ス又日光御殿跡ト云處ニ一株アリト云
尾州ノ定光寺山ハ日光ヲ摸シタルモノト云元
尾ノ祖源敬君ノ廟畔ニ一株アリ山僧ハ之ヲ「ク
ロマツ」ト云傳フ此樹ハ日光或ハ他山ヨリ移シ
栽ヘシモノヤ詳ナラズ或ハ自生歟シレサレドモ
余壮年屢此山ニ采薬セリ然ドモヿノ山中他地ニ
産スルヲ見ズ

ツガハ諸國山中多ク産シ人家庭際ニモ亦多ク
栽ル者ナレドモ此樹ハ稀ニシテ名古屋ニテモ後

園ニ植タルモノ間々アル而已ナリ
葉形扁ナラズシテ殆ト四稜ナナシ一尖ニシテ
岐ヲナサズソノ先鋭利人指ヲ衝ク其枝ニ着ク
ヤ齊整排列セス枝ノ周圍ニ乱生シテ上ニ仰ク
ソノ鱗果ハ長大ニシテ鱗片薄シ

明七ノ十月四日夜燈下ニ記ス　伊藤圭介

又自御尋ノ小草ハ澤地ノ産ニシテ拙生尾ノ山
荘御存ノ太古山房邉マムシ池ニモ産ス處暑前
後花ヲ着ク「サハタウガラシ」ナリ

樅 方言モミノ

バラモミ

武州多摩郡御岳（ミタケ）山本社ノ階下左ノ方奥ノ院路
上ニハ樅杉等ノ大木アリ樅樹モ多シ其林中ニバラモミ
ノ大樹アリ幹ノ太サ五囲餘モアリ聳立ス方言トラオ
又タウヒトモ云フ土人云フ此樹ハ此山ニ唯三本アルノミト云フ又
其材ヲ用ルヿヲ知ラストモ云フ
此樹下ニ於テ昨年落ル所ノ毬ヲ得又毬ノ付タル枝枝ニ
葉ノ残タルヲ得ルヲ以テ始テバラモミナルヿヲ知ル
樹下ニハ多ノ旧毬アリト然モ更ニ嫩苗ヲ見ルヿナシ生鮮
ノ枝葉ヲ得ルヿ能ハザルヲ以テ今樹下ニテ拾フ所ノ舊

バラモミ

[redacted] マツハダ [redacted] アルコキアナ　華儒文

エゾマツ　メウセミ　信州タケモミ　エゾエンシス　案穣文

リウセン　ミヤウ富士　シラモミ　ミヤウツミ

ニヒモミ　ニヒモミ　薩摩国　花葉　即樅ノ一種

球果及ヒ枝葉ヲ以テ記ス

球ハ腐敗ニ近クヲ以テ湿気ヲ含ムヿ多シ　鱗片皆疊伏セリ　長サ壱寸半許　径一寸許ナリ　枝頭ニ着クト雖モ　損落シ易シ　枝梢ノ葉長四分許　方形ニシテ尖ル　其基ハ皆撞起シテ外ニ向フ　整列シテ周旋スヿ甚正シ　球ヲ乾ス中ハ鱗片皆反起スルヲ以テ之ヲ十分成熟ノ球ニ比スルハ　甚細長形ヲナスト雖モ是全ク未熟ノ者ノ損落ニ由ルナラン　然レ𪜈原本月之底ニ比スルハ鱗片頗小ナルヲ覚フ

明治十一年八月十二日　田中芳男記

日光山ノ西北白根山中ノ所産シラモミノ実ヲ採
査ル所北海道産エゾマツ同物ニシテ Abies
microsperma ナリ花彙ニ出ルニレモミハ全ク
ニッカウモミニシテ樅ノ内ナリ此者ト同ジカラス
但シ花彙ノ初版ニハ樫ニ充レドモ再版ノ方ハ
漢名ヲ省ケリ

十一年六月十三日

藤田克三君

田中芳男

右ノ実ハ者為ニ言ノ部ノ中ニ乗ス進タ
返ル之ノ作也

卅子實日光山ノ西北白根山中ノ産
即シラモミニ結ヘルモノナリ又一ツハダニ結フモノ
ヲ見ルニ其形状ヲ同フセリ卅二樹葉形較殊
ナリト雖モ固ヨリ同種タルヲ知ルヘキナリ嘗テ寶暦
己卯田苑房ノ花彙ヲ讀ムニ曰ク

樫 ニレモミ

大和下野地方山中ニ多シ京師天台山ニ一
株アリ高聳直身葉鳳尾松ニ似テ短小背
白シ夏紅花ヲ着ク鉄色草穗状ノ如シ後毬ヲ

結フ形落葉松毬ニ類シテ稍長シ云〻
按スルニ落葉松毬ニ類シ稍長シトハ能ク此子
実ノ形状ヲ尽セリ又江花ヲ着ク者ハ雄花
ヲ説クニ非スシテ雌花即子實初生スル者ヲ
指スニ似タリ柳ニレモミモ亦此状ノ実ヲ結ヘル
者カ或ハ其ニレモミト称スルモノハ此ニシテモミ又ハミツ
バノヲ混認セシモノニハ之ナキヤ

伊勢國多氣郡大杉村大杉ノ説

多氣郡大杉村ノ大杉ハ三重縣下稀群ノ巨樹ニシテ所謂神代大屋津媛尊ノ木種ヲ天下ニ分布シ給ヒシ頃発生セシト云フモ敢テ虚ニ非ズ実ニ幾星霜ヲ経タル神木ナル知ル可ラザル也而其大サ及ビ高サノ如キ昔ヨリ量リ識ルモノ無シ該村ノ山間ニ蓊葺トシテ聳立シ四圍玉垣ヲ結ヒ周ラシ此後ニ小社アリテ大杉ノ宮ト尊崇ス此レ邑名ノ因テ起ル処ナリ村民此樹ヲおすぎさまト称シ假リニモオホスギ杯ト放言スル者ナシ該村ノ吉凶禍福皆此ノ神木ニ依頼スルヿ実ニ人ノ生存ニ奉仕スルガ如ク敬心セリ夫レ如是稀代巨大ノ霊木ニシテ敢テ世

ニ知ルヽヿナリ且詩騒歌客ノ詠吟ニ漏レ又古今ノ物ニ見ヘ
ルヿナキハ蓋シ又故アル哉該村ノ位置タルヤ本刻西南ノ極
隅ニ在テ一蹴大和國芳野郡ニ隣シ東カヽズリ嶺或ハ笠霽（カヽヅリ）
ト称スル大山突起シ僅ニ棧道ヲ以テ人ノ並行シ得サル一髪
路ヲ要シ其右ハ数百丈ノ下所謂宮川ノ源流タル深淵ニシテニノ
常ニ碧色渦瀾之ヲ望メバ脚震ヒ眼眩ノ程ノ危道タリ明治
ノ聖代ニシテ尚且如是然ルヲ況ンヤ数百年ノ昔ハ人ノ往
来スル所ニ非ザリシハ疑ヲ容ザル所ナリ故ニ樵夫ノ斧鉞ヲ
免カレ特リ傑立安全ニシテ少シモ塵埃ニ触レザレシモノト
思考セラレタリ而該村ノ人民タルヤ往古平家ノ落シ人

紙職板

或ハ北畠家ノ末葉ヒ云ヒ為シ人戸僅ニ数十ナレ𪜈各々烏髪ニシ
テ言語ヤサシク俗称モ亦平民ニハ稀ナル右近左エ門伊織之
助ナドヽ称シ昔ハ染歯ノ人モ係アリシト云フ其家居ハ四
圍杉檜或ハ樅枝ニシテ雨覆ヒ一切毛甍ヲ用ルヿナク又盗賊
ノ害ヲ知ラザレバ堅ク戸ヲ閉チ寝ヌルヿナシ実ニ欲界ノ
仙境ナリ田畑アレ𪜈稲麻ヲ生スル地少ナリ平日食トスル者
ハ彼ノ橡餅ニシテ香蕈ヲ累シ蜂蜜ヲ醸シ以テ之ヲ隣
村滝谷ニ貿易シ米麦ヲ得テ僅ニ活路ヲ要スル三目下薪炭
ヲ造リ木材ヲ伐出シ宮川ニ輸流シ稍々経世ノ途ニ就クト云フ
本村ハ地図ヲ閲スルニ北　三十四度十分乃至二十分ノ間ニ

東京大学総合図書館

在テ大杉ノアル処マデ半里ニシテ稍近シ其傍一帯ノ渓水
涓々流レテ竭ズ其清麗ナル掬スルニ堪ヘタリ霊水ノ高ハ前
巳ニ記セシ如ク詳ニ之ヲ知ルモノナシト雖聞ク処ニ依レバ凡
枝マデ地上ヨリ十丈餘其ヨリ萬條四方ニ婆娑トシテ其麾
カリヤ幾十丈比測リ知リ難ク重畳蒼翠自ラ紡錘ノ形ヲ
為スコト常杉ニ異ナラズ其末梢ハ枯レテ兀立セリ幹ノ
囲凡四五丈ニシテ直径ハ一丈餘アリ而南ヨリ之ヲ望ム時ハ
扁圓ヲ為セリ惟フニ此ノ地萬峯屈伸シテ朝ニ雲ヲ吸フ
テ枝葉ヲ乾シ暮ニ雨ヲ吐テ根幹ヲ湿ス等殆ンド四岳并
揖シテ此ノ霊樹ヲ培養従事スルカ如ク然リ

紙纖板

右明治十三年四月十二日該村ニ到リ見聞スル所
ヲ記ス
文杉写生ハ當縣下匠工櫻井金翠西ニ認メ方一回
内國勧業博覧會場ニ出品シ當時文部省ノ集
購求セラレタリ

明治十七年十二月十九日依佐下門再識之

丹使修治

アヤスギ
筑前香椎宮ノ神木ニシテ大木一株アリ周
囲ニハ二重ノ垣アリテ人近ヅクベカラズ其樹ハ尖
大ナル塔形ヲナス未タ腐朽ノ老木ニハアラネ
其根ノ所ニ蘖カ枝カ実生カ人手ヨリ大ナル
モノヲ生ゼリ其ノ葉ハ杉ニ似テ柔カク大木ノモノ
ソノ小木ノモノ同様ナリトテ葉付枝ヲ持来リ
鳴門ノ義民氏之ヲ示サレタリ今其枝ヲ見ルニ
葉長キ所寸許短キモ寸許ト混ジテ相交換
スルコト較エンカウスギニ似タリ

此説ハ思之ハ播州片山生人曰ク可ナリ
宗房ヲ来ノ中指上シ物産名家ノ嘸遊
あきらかにしたし也
十七年十二月十三日　田中芳男
天彦房写し

紙鐵板

物品識名ニ アヤスギ 塔杉 王氏彙苑 トアリ
重修啓蒙杉ノ條下(増)ニ 一種アヤスギ トイフモノアリ 王氏
彙苑ノ塔松ナリ 小木ニシテ葉細ク軟ニシテ杉葉ノ強
クシテ手ヲ刺スニ異ナリト云ヘリ 是ハ博物局園ニ植ヘアル
同ニ 灌園遺稿 アヤスギ ハ キウクワウスギ ノ一ニシテ前ト異之
其鼇頭ニ 塔松 王氏彙苑 大和本草 筑前香椎ノ宮ニアリ
トアレド今大和本草ニ見ヘズ 到底杉ノ変葉ト称スベシ
右ハ書ヨリ 鋸杉 温杉 トハ別物ナリ

明治五年六月七日 田中芳男記

クロベスギ 島ヒノアスナロ之説

クロベスギト称スル材ハ東京府下木材商ノ多ク販売スル所ニシテ或ハ杉ノ材ノ暗黒色ナルモノヲモ称スレドモ別ニ一種ノ材タルコト分明ナリ 然ルニ其樹葉如何ヲ知ラザレトモヨリテ或ハ子ズコナルベキノ説アルノミニ止リシカ今回出品セル加賀石川県下ノ材ニ臘葉ヲ添ヘタルニ子ズコナレドモゴロウヒハニ近シ子ズコハ木曽ノ方言ニシテ草家ノ称スル ヒメアスナロ ナレバ羅漢柏ノ一種ナリ又花戸ニテノ称スル ゴロウヒバ ハ是迄ヒメアスナロノ属ナルベシト思ヒシガ本日小野職愨氏ノ山林局試験場ニ於テ実検シタル説ニテハ ゴロウヒバハ即チヒメアスナロニシテノ実モ同シ唯ゴ線多キ所ニ生シテ葉背ノ白色ヲ失シ且嫩弱扁平ノ葉質ナルニシテ厚手ナリ 西崎

同様ノ看ヲナスモノアルノ説ハ実検明瞭信スヘシ然レトモ山林陰欝ノ地ニアルト花戸ニ移植スルトニ因テ其色ヲ異ニスルヨリシテ遂ニ別物ト看過セシト見エ縦令ヒ同物ナラサルモゴロウヒバノヒメアスナロハ変葉ト云フニ過キス因テヒメアスナロハ一名ネズコ材ヲクロベスギト称スヘシ今自確定スルナリ

明治十四年四月六日　田中芳男記

一云ムロ
ミをしそ
此材中心微ク紫赤ヲ帯ヒ臘気ノ香アリ木理及質皆詳ナラスクシテ人ニ殊ナラス蓋シ古訂ナクシテ人ノ変生ニシテハ無之ニ付ス武陵教示奉願候
十一年五月六日
藤田克三
見本ハ呈上ス

○ヒムロ 東京花戸 ヒメムロ 物品識名 綠杉 天門冬ノ条

Retinospora pisifera, Var. !!

此松柏科ニ属スル常綠喬木ハ其葉纖細柔軟ニシテ美観ナルヲ以テ花戸ニテ栽培繁殖セシムル事多クヲ以テ庭園及綠垣ノ樹トス

明治十一年五月地理司藤田克三ヨリ右材片径三寸許及生葉ヲ贈ル是ハ駒込妙義阪下ニ在シモノニテ高サ弐丈半許アリシト材ハ白色微黄ニメ中心ハ淡赤褐ナリ皮ハ茶色ニシテ外面ハ暗褐色ナリ臓氣少クアリ香氣少シ

一ヒムロ葉

[illegible]

[illegible]

五月七日

藤田克三

此樹ハ是迄変葉ナルヤ否ヲ確知セズト雖モ今次ニ余ガ實撿スル所ノ説ヲ載セテ全ク花柏ノ変化ナルヿヲ證ス

維新以二年前伊豆天城山蓁湯ヶ島村ノ原野ニ於テ高三丈許ノ花柏(サハラ)ヲ見ル其葉所〻ニ変葉ヲ生セリ之ヲ撿スルニ全ク絲杉ナリ今尚乾腊葉(サハラ葉トヒメムロ葉ト垂ヒ着クノ品)ヲ藏ス

如此花柏ノ変葉ナルヿハ前ニ云フ所ノ如キノミナラズ樹幹皮材ヨリ葉ノ位置及葉背ノ白色ナル等全ク花柏ノ徴アリ唯未タ絲杉ノ花實ヲ撿セザルヲ遺憾トスルノミ

明治十一年五月八日

田中芳男記

東京大学総合図書館

本文ヲ記シテ藤田氏ニ得ル所旧氏ノ
実着ノ枝ヲ贈リタルノ一事ヲ添フ実ニ
同氏ノ説ノ如ク其実ノ形全ク花柏ニ
差違ナシ茲ニ於テ益花柏変生ナルヿ
ヲ決定ス

五月十四日

田中芳男再記

先日錦杉ノ材及生葉ヲ呈シ教
示ヲ請フニ因リ一篇ノ記文ヲ贈與セラレ
始テ花柏ノ変生ナルヿヲ聽知セリ猶記中
花實云ヒシノ結文ニ據リ随處ニ探捜シ竟
ニ一樹ノ實ヲ結ヘル者ヲ認メ得タリ之ヲ検
スルニ果シテ花柏實ト纖毫ヲ差ヘス因テ
更ニ帶實ノ一小枝ヲ呈シテ以テ感謝ス

明治十一年五月

藤田克三

東京大学総合図書館

カマクラヒバ

庭樹ニ称用ス扁柏(ヒノキ)ニシテ其源ハ鎌倉ヨリ
来ルト地錦抄ニ出テタリト片山氏ハ云ヘリ
此常緑樹ハ何レノ地ノ自生ナリヤ知ラサレトモ全
ク扁柏ニ外ナラズ唯葉厚クシテ密表裏ノ
別ナキガ如シ又枝密ナレバ庭樹ニ用ヒ其観ノ
美ナル尋常品ノ比ニアラズ
岡毅曰植物園ノ竹林中ニ大木アリ囲ミ
三尺餘モアラン
片山曰葉実ノ球状ノモノ扁柏ヨリ大ナリト

按ニカマクラヒバハ扁柏中ノ愚品ニシテチャボヒバ
トヒノキノ中間位ノモノニアラン チャボヒバモ素ト
ヨリ扁柏ノ変性ニテ葉ノ縮ミタルモノナレバ或ハ
其原ニ復スルヿアリ
又マヒノキト称スヘキモノハヒノキニ比スサハラノ
葉形ニ較ヒノキニ類スヘキノ品
明治十四年三月三十日　田中芳男記

前説ニ異ナシ別ニ異考ナシ
カマクラヒバノ名ハ江戸〔東京〕ノ常ニ云フ所
ナリ其名ハ鎌倉ニ此樹ノ自生
アリヤ或ハ該地ニテ其変生出来
タルヤ未タ之ヲ聞カス乃チ此者
ハ畢竟ヒノキノ変種ニシテ此者ヲ之ニ
比スレハ葉形乃チ品ハ葉密ニシテ
之ヲ見ルニ頗ル自カラ故ニ多ク
園庭ノ観ニ供スル也
十四年三月三十一日夜　錦窠記

薩摩ノ材木

十二年十月五九日　町田氏ヘ問ノ所及其他ヲ附記ス　田中芳男記

一メギ　皮緑色ニ似テペンキ塗ノ如シ但シ材ハ白色ナリ

益ハ小メギ小蘗ニハ非ス

一ニラキ　箸ニ作ル白色ノ材ナリ

一紅色ノ木　紅條アリ美麗ナリ今其名ヲ忘ル

拇ヘニケヤキノ一ツカモケヤキニハ非ル由

一グミ　黄色ノ材堅クシテ髄心アリ又小髄光線アル

一アワキニ似タリト云

一山高曰小笠原島産ノ葉材ハ水ニ沈ム島産ノ葉

小然ラズ然ルトキハ葉ニハ非ルベシト云ヘ留曰島産ハ冬

細工スベシ 小笠原島産ハ堅クシテ冬月ハ彫刻ヲナシ難
シトモ云ヘ 按ニ熱國産ハ木材緻ニ堅硬ナルモノ多キ故
モ亦其理ニ因ルカ 或ハ葉中ニ異種ナルカ

一 武井曰 神田アルハ屋ニ麒麟木トモ云アリ 黄色幅ハ八寸ヨリ
一尺モアリ

一 片山曰 伊豆 黄蘗葉トモ云アリ 黄色ナレド葉トハ異ナリ
テ 樋斑アリトナリ

東京ニテ杖ヲ製スル元材價略表

一 黒檀 ホンコクタン		六十文
アヲコクタン		十五文
一 檳榔		十五文
一 タガヤサン		十五文
一 籐 大ノ方		二十文
小ノ方		六文斗
一 竹根	大 中 小	三十文 二十文 十文
一 シタン		十文
一 山椒		十文
一 クハリン		五六文

一黒竹　五束
一齊墩果（エゴノキ）樹　三本
一ヨソゾメ　仝上
一栗材　仝上
一サクラ　仝上
一カンチク　・
一[illegible]樹　・
一漆
右日本橋近傍洋傘舗ニテ調ヘリ
十二年
明治[illegible]十二月下旬　田中[illegible]

地理局試験場見聞録　明治十二年三月三十日西ケ原ニ於テ

一佛国博覧会ノ節交換シタル木材組製ノ物品数十種アリ
一又山林用ノ器械多クアリ其内最モ巧ナリト見ルハ樹根ヲ掘リ其ヲ勝タル傍根ヲ切ル鋸ニテ鍵状ノ製作ナリ以テ其根下ヲ穿チ上ニ立テ両人又一人ニテ搖切ルベキ具ナリ
一佛国来松毬数百余種アリ此内ニハ奇異ナモアリ又松類ノ実ヲ入レ即松種ノ実ナリ其外種子保存アリ
一豪洲来ノ材数板材丸太及ヒ一年生ノ丸太等アリ　ユウカリプタス材ハ一年生トナス而成輪アリテ一年生トハ思ハレズ

一 印度材ノ見本アリ其洋名ハ皆活字ヲ刻シテアレハ
露滅ノ患ナシ是ハ数簿山アリ
又此数ノ見本アリ皆洋書形ニ作レリ
一 支那材見本数十個アリ 花梨ハタガヤサン 鉄
油木ハ杉ニ近シ 紅木ハシタンナリ
一 印度材見本ノ内 Pterocarpus santalinus.
(Red Sanders) ベニクハリン ナラン
一 緬甸産 Buxus sempervirens ノ種子ハ我
琉球産黄楊(ツゲ)ノ実ト異ナリ 故ニ黄楊ノ洋名
定ムベシ 此二種ノ種子ハ悉来レリ

一 印度地方ヨリ来ル竹ノ大幹数本ノ包ニツツミ長サ
ニ間モアリ 包ミハ未タ解カズシテアリ 竹尚生(ナマ)ナルアリ 其竹
太サハ苦竹(マダケ)位アリ 包ミハアンペラニ似テ粗キモノ
ナリ
一 琉球材見本五種アリ
一 小笠原島材多シ 兼テ博物局ヘ分配スベキ心得
ナレハ早ク取ニ来ラレタシトナリ
一 内国産ノ材ハ 内国博覧会ヘ出品セルノ外商標
集スルモノ多シ 又種子モ沢山アリ 然レモ山林家ノ
学術上ニ要用ナル品物ヲ見ズ

一 塩入様子ノ内ニハ尚生鮮ノ者アルハアリ腐敗ヲ
招ク患アリ 宜シカラズ
一 鹿児島ノ産ハ 椿子アリ 東京ノ品ト形同クシテ
其大サ二倍余ナリ
一 マメガキノ材ハ羽前村山郡澤渡村ノ産アリ
黒斑ヲナス 即シマガキ ト称スルモノナリ
一 近頃工部省工作局ヨリ生ノ材ノ木口ヘ膽礬水
ヲ注入シ腐敗ヲ防ク法ヲ試験スルニ 長サ二間
モアルモノハ上端ヨリ水液多ク出ル丁勝セヶ様ニハ
一 淡テ膽礬水ヲ噴スニ至ル 云々ノ話アリ

一 木材ノ削タル面ヘ尋常紫鉚（ゴムラツク）脂製洋漆
液ヲ塗ル片ハ多ク色アリテ材色ヲ失ス 因テ片山
氏横須賀ニテ覚ヘシ 白ラツク製液ヲ製造シ試
用スルニ 更ニ色ナキ洋漆ニシテ木材其他ニ塗ル最
佳ナリ 白ラツクハ一キロ（玄ハ百六十目）価壹円六十
仙ナリ アルコホル四百グラム（百八匁）ノ内ヘ白ラツク百五十
グラム（四十匁）ヲ入レ溶解スルヲ待テ用ユ 但シ木材ハ
豚油ヲ引キ夫ヲ綿ニ浸シ洋漆液ヲ布ニ包ミ
除々ニ引クナリ 此塗方ニハ精巧拙アリ且其製法
モ十全ナル書記アレハ別ニ片山氏ニ借ヘ答ナリ

一 カナダバルサムヲ以テ製スル ワニス 上等透明ナレド
価貴シ 次白ラックハ 価廉ナレトモ 呼大ニ雨含ノ
モノナリトス

明治十一年四月十七日　田中芳男記

埋木ノ記　丹羽敦

宮城縣下ニテ埋木ノ細工物ヲ出ス二種
アリ一ツハ名取川ノ埋木木コレハ真ノ
本材ニテ埋木ナリ竹箱細工ヲ指シ竹節ヲ
施スコトヲ得ヘシ一ツハ山ノ中腹欠ケ
落チタル所ヲ見ルニ先ツ草木ノ生
植スル部黒土ナリ其下ハ赤土ナリ其
下ハ砂交リノ粘土岩ナリ其赤土ト
粘土トノ間ヘ黒キ一條ヲナス所アリ
其黒キ所ハ剣係ヘ埋木ト唱ルモノニテ

黒玉
燕玉
枯玉

宮ハ木ニアラズ害スル所山中ニ生スル所ノ樹木ノ膏脂無出シ漸ク凝リテ剛植ノ如キモノトナル年ヲ経ルニ随ヒ石ニ化ス其半ハ化シタルモノヲ以テ古ハ埋木細工ニ用エ銷ヲ施ス可能ハス故ニ細工モ板ノママニテ益ノ類ノミナリ大ニ化シタルモノ則石炭ナリ同過スル所ハ石炭ヲ云フハ古ノ如クニ候

英華字典 影木 Amboyna Wood ハ即チ Pterospermum indicum ノ英名 斑点アル材ナリト云フ 此樹ハ亜細亜熱帯ニ産ス 梧桐科ニ属ス 或ハ加之荷科ニ属セリ

影木之説

百品考三編上巻三六葉ニ説アリ マイブタウ 又 アンモニボク トモ云フ アンモニボク トハ 安汶木ノ義ナリトゾ 猜ヒクハ同書ニ就テ見ルベシ

按ニ此樹又豆瓣楠トモ云フ 又俗ニ雲紋木トモ云フ 安汶木ノ転ジタルカ 又雲紋ノ義ニヨルカ 英華韻府ニ Knot wood 洋映木トアリ

此材ハ従来支那ヨリ伝ヘ文人雅客ノ珍愛スル所ナリ

又西洋ニテハ桃花心木(マホガニー)ノ如キ輪座アリ甚ダ相似タリ 蘭人ニテ用ルモノハ同国産楓樹(モミヂ)ノ瘤塊ナリ 此樹ハ蘭国ニ

ナラズ欧洲ニテモ亜米ニ植ヱ我ヨリモ近キモノナリ此瘤塊ハ
米国博覧会ニ於テ之ヲ見ル又カリホルニヤ山道ノ驛舎ニテモ
亦之ヲ見タリ外面小疣密布シタル瘤塊ナリ
本邦ニ於テハ明治八年大阪博覧会ニ出ル所ノ取寄セシ
是ハ紀州日前宮境内ヨリ堀得シ大瘤塊ノ一片ナリトゾ其
大サ長サ三尺許幅弐尺許外周ニ小疣密布シテ佛頭状ヲナス
全面ニハ環紋樟ノ圓紋ヲ散布ス真ニ舶来ニ劣ラズ
是ハ樟ノ瘤ナリトヘリ或人ノ説ニ肥後ニ産スルモノ是
ト同様ナリトヘリ
豆州熱海ハ果樟木ノ細工人多ク従テ甚良材モ多シ其ハ原

本綱 樟ノ集解
中日
其[illegible]近根年深
向陽者結成卓木
山水之状俗呼為
骰栢樹

来伊豆ノ地ニ樟樹多キヲ以テ此地ニ開ケタルモノナルモ今ハ次第ニ
切リ尽シテ即今ハ駿河遠江ノ地ヨリ此地ヘ持来ルニ至ルト云フ
尤ル天城山ニ大木アリテ近年切タルニ最上ノ木理アル大
材多ク取タルニヨリ造船所ニ於テ艦中装飾ノ為ニ之ヲ
買入ル因テ其内一枚ヲ博物局ヘ求ム其幅四尺以上アリ
其木理最上ナラズトモ一ツト銘モ亦是影木ナリ樟ノ如輪杢ト
称ス熱海ニ於テ用ル所ノ材中最上等ナルハ是亦瘤塊ニ
シテ周囲皆小疣ヲ密布スルコト前条ニ同シ原来樟ニ限ラズ
成長年限ヲ過タル大樹或ハ其年所ニ至ラズトモ瘠地ニ
在テ成長力ノ衰変シタルハ必ス如輪杢ヲ一ナラズシテ外

小野田氏樹根ハ久ク水中ニ在リシヲ以テ香気ヲ脱スト云フ 是亦樟ナラント

面ニ瘤ヲ散布ス 尚成長スルニ従ヒ愈其瘤ヲ全面ニ満
布スルニ至ル 然レトモ瘤塊ニ非ルモ亦環紋ヲ生スルハ影木ト
同シ
那十年四月十五日相州横須賀ニ到リ舟ニテ猿島ニ赴キ
同島ノ周辺潮水往来スル砂中ニ大ナル樹根多キヲ見ル因
テ片山直人氏ニ依頼シ数株ヲ取寄スル内ノ一根株ノ根
際ニ瘤塊多キヲ見ル因テ鋸劃スルニ果シテ雪理様ノ木
理アリ影木ニ異ラス 唯大ナルノミ 且此材ハ恐クハ[illegible]
[illegible]アラクス オウン真[illegible] 褐赤色ナリ
右ノ諸説ニ拠レハ影木ハ決シテ一樹ノ名ニ非スシテ尚

〇（樟ニハ牡丹樟トモ云フ）

△七王樹ノ紋理[illegible]称セルモノ 亦如輪杢ノ如シ 是ハ幹ノ外面ニ顕レ 皮上ヨリハ見ヘサルモ 人或ハ外皮ヲ剥キ之ヲ識験スト云フ

我邦ニテ如輪杢又玉杢ト云フカ如シ 但シ此語ハ楠樟抔
ノ環紋アル材ニ名クレトモ他材ト雖モ此紋理アルモノハ皆同
称ヲ用フヘク 又影木ト称シテ可ナリ 唯樟ニ至リテハ樟
脳ノ香気アルヲ以テ衣服或ハ書冊等ノ器具ニ作ルハ
可ナレトモ食用殊ニ茶抔ヲ入ル、器ニ不可ナルヲ以テ人或ハ
之ヲ忌ミ厭セリ 樟[illegible]アラクス ニ至リテハ香気ナキヲ以テ全ク
影木ニ彷彿スル
樹木老テ容易ニ瘤ヲ生スルモノ多シト雖モ 公孫樹
百日紅 松等ハ人ノ熟知スル所ナリ 又楢数ノ皮内
ニ小瘤ヲ生シ久シクシテ本幹ト系状ノ連續アルノ外ハ

東京大学総合図書館

全ク外皮ニ被ハルヽニ至リ大サハ一豆大ヨリ胡桃大ニ至ル
形ヲ整齊ニ念珠トナスヘシ町田氏所ナス余ハ之ヲ名
器ノ撮子又引手抔ニ用ユ堅靱ニシテ破裂ノ憂ナシ
又當十年三月小森氏箱根ヨリ携ヘ来ル所ノ奉呈
ノ木瘤ハ柞木ナリトテ実ニ周囲共ニ外皮ヲ被リ
タルヘノミニシテ本幹ト連續スルハ僅ナノ所嘗アリ

明治十一年七月七日　田中芳男記

用材強弱表　一千八百六十九年 [illegible]

	堅靱之度	
一	秦皮　トネリコ　ヌゴノキ	一千斤
一	樺木　カバノキ　シラカンバ	七百拾八斤
一	黄楊　ツゲ	一千二百五十斤
一	桧　ヒノキ	七百十斤
一	栗　クリ	六百五十六斤
一	榆　ニレ	八百三十七斤
一	槭　セミヂ	六百五十六斤
一	蝗樹 即 擬合歓　マビニヤ　プセウドアカシア	千二百八十斤

東京大学総合図書館

一白樺　クヌギ類　七百十八斤

一白松　松類　五百五十斤

一落松　同　七百五十斤

一白楊　ヤマナラシ　四百三十七斤

一胡桃　クルミ　四百八十七斤

右ハ米国産ノ樹ノ量ハノ度ナレバ之ヲ以テ我同ノ樹ニ充テ難シト雖モ其表ヲ見テ其大概ヲ知ニ足ラン

明治七年十二月十六日

田中芳男

Farm Implements and

Farm Machinery, and the Principles of their Construction and Use;

By John J. Thomas

New York

Orange Judd and Company,

1869.

Strength of Materials

四義目　内務省

Woods		
Ash, toughest 堅靱ナ	1000	lbs
Beech	718	〃
Box	1250	〃
Cedar	710	〃
Chestnut	656	〃
Elm	837	〃
Locust 蝗樹即擬合歓	1280	〃
Maple	656	〃
Pine, white	558	〃
〃 pitch	750	〃
Poplar	437	〃
Walnut	487	〃

列試用 内務省
理義用 内務省

(1.)
フジキ　方言 イクノキ　Sophora platicarpa Max
林氏綱目第十綱一目　荳科
鏇器用材

(2)
ゴンズイ　野鴉椿　Euscaphis staphyleoides S. et Z.
林氏綱目第五綱三目　省沽油科
薪炭用 或ハ箱函ヲ作ルニ

(3)
ケヤキ　欅　Zelkowa Keaki Sieb.
林氏綱目第四綱二目　蕁麻科
建築材用

(4) オニモミヂ　*Acer diabolicum, Bl.*
林氏綱目第廿三綱一目　槭樹科
箱函器物ヲ作ルニ用

(5) キフヂ　旌節花　*Stachyurus praecox, S. et Z.*
林氏綱目第五綱一目　茶科
幹ヲ以テ放酒筒ヲ作ルニ適ス

(6) ツノハシバミ　*Corylus rostrata, Ait.*
林氏綱目第廿二綱九目　葇荑科
實ハ食用トス

(7) ハコヤナギ 又ヨメフリ　白楊　*Populus tremula, L.*
林氏綱目第廿二綱七目　葇荑科
燐枝用材

(8) トヽマツ　*Abies alcoquiana.*
林氏綱目第廿一綱十目　松柏科
建築用材

(9) ミヅキ　*Cornus brachypoda, S. et Z.*
林氏綱目第四綱一目　山茱萸科
薪炭用

(10) ケンポナシ 枳椇 Hovenia dulcis, Thunb

林氏綱目第五綱一目 鼠李科

室内装飾材又器物ヲ作ルニ用

(11) ヤマバウシ 一名イツキ 山安奶

羊

林氏綱目第四綱一目 山茱萸科

Cornus Kousa, Buerger

器物ヲ作ルニ用

(12) ハンノキ 赤楊

林氏綱目第廿一綱四目 葇荑科

Alnus maritima Nutt

實子染料 材ハ箱函ヲ作ルニ用ユ

(13) メハリノキ

林氏綱目第廿一綱四目 葇荑科

Alnus incana var glauca, A. f.

實子ナ染料ニ供ス

(14) ミツカウフシ

林氏綱目第廿一綱四目 葇荑科

Alnus sp.

實子染料

(15) カナシデ

林氏綱目第五綱一目 葇荑科

Carpinus sp.

薪炭用又幹ノ直ナルハ杖或ハ洋傘ノ柄ニ用ユベシ

東京大学総合図書館

○竹実

明治十二年九月十三日　田中芳男記

天保年間米穀不熟ニヨリ大ニ荒歉ナリシトキ人民竹実ヲ取テ食餌ニ充テ為メニ饑餓ヲ免レシコトノ話ハ往々口碑ニ傳ハリタリ

今信州伊奈郡下ノ老人ニ逢ヒ竹実ノ事ヲ尋ネシガ竹実ハ近山ニ自生スル スゞタケ 及ヒ深山（木曽峠ニ多シ）ニ生ズル ヘイチク ノ実ニシテ他ノ竹実ニハ非ルヨシ 此実ヲ結ブノ後ハ其竿皆枯レタリ 其実ヲ結ブニ當リ人民争テ山ニ入リ採集シ一日ニ採ル所ヲ荷ナフコト能ハザル量アルニ至ル 之ヲ採ルハ筵ヲ胸下ニ懸ケ竹叢ニ入リ実ヲ結ブ

明治十六年十二月十二日　小野職愨

穗ヲ集メ振リ落シ沢山ニ集ム是ナリ勉強者ハ五六俵
ノ竹実ヲ集ムルニ至リシト食法ハ粉トシテ団子（ダンゴ）摘入（ツミイレ）
等ニ作リ食スルニ蕨根ノ粉葛根ノ粉粉ノ如ク飽クナク
数日間継続シテ食スルヲ得ベキノ美味ナリトハ（松ノアマハダ）
右ハ天保ノ荒ナレド淡竹苦竹ノ実ヲ結ビシハ真竹ナリ
惜ニ実ヲ結バザルニ当レバ前年ニ華繁盛ナリ沢山ニ
実ヲ結ブ但シ各地同年ニ結ブニ必ズシテ総方多クニ
結実ニ至ル結実スルハ華叢ニシテ枯ル因テ竹工ハ大ヒ
困難シ豫メ貯蓄スルニ至レド尚真用足ラザルヲ憂
ヘ殺シノ代品ヲ作リ出スニ至レリ此大ナル竹ハ実ハ（結バ）

食用スベキ程ノモノナシ故ニ食用スルハ前ヘイヂリスバチ
ニ限ルトユフ
此結実ニ因リ各地ノ竹林沢山ニ枯レド全ク根尽
ルニ非ズシテ真竹ハ細小ナルモノ生シ沢山ニ繁茂シ
従前ニ復スルモ（再ビ）十分ノ竹ヲ生ズルニ至ルハ十年余ノ後乃
至十五年ナルモ経ルトユフ

東京大学総合図書館

六四四

新竹蠟ヲ生スル之說

曾テ薩广人某ノ談話ニ彼ノ地ニ産スル竹種尤甚夛クシ就中莫竹孟宗ノ二種世用最廣シ桶帶籃其ノ外種々其リ是世人ノ知ル処ナリ今コヽニ贅言セス竹ノ蠟ヲ生スルハ未嘗テ人ノ言ハサルトコロナリ因テ其概畧ヲ述フルナリ薩广ノ地ハ最巨大ナル竹ヲ生スル処ニシテ竿ノ大ナルモノハ円径六七寸余ノモノアリ是又世人ノ知ル処然ルニ孟宗竹ト稱スモノ一本ヨリ取リ得ルノ量凡半紙ノ全葉ヲ以テ作リ

ル蠹中半余ニ及ヘリ是尋常ノ木蠟
ノ実トヒトシク多量ヲ取ルコ能ハザル所
其白蠟ノ代用ヲナスニ足ル可シ故ニ新竹
ヲ採リ適度ノ火氣ニ觸ルヽ時ハ漸ク油氣
ヲ表面ニ發シ美麗ノ光澤ヲ出スナリ
此蠟ヲ採ルノ手段ハ初夏新筍解籜
ノ后五六ケ月ヲ歷ル時ニ至リテ節ノ辺ニ雪
白ノ細粉ヲ見ル是ヲ取リ溶解シテ竹蠟ヲ
得ルナリ~~雪状ノモノハ自然雨露ニ洗~~
~~竹ノ表面ニ流~~

明治十二年三月念　田留久成記

竹ノ肥料

竹ハ馬爪ノ屑ヲ肥料トシ用ウルトキハ大ニ効アリ又竹ヲ植ル
處ニハ前年生スルモ赤馬爪ノ屑宜シ而シテ溝（三尺乃至二尺）ヲ掘
テノ、呼フハ太キ竹ノ内節ナキモノハ中ヘ馬爪屑ヲ六七日以
ル土ヲ入レ培フトキハ竹鞭其内ニ入リテ其地ヘ來リ筍ヲ
生ス其地ニ馬爪ヲ入レバ次第ニ其地ニ繁殖シ遂ニ他地
ノ竹叢ハ衰フニ至ルモノナリト　武井山林局長實驗
ノ話ナリ

菜ニ馬爪ノ屑ヲ用ヒテ効アル事ハ牛蹄ノ屑モ鼈甲ノ屑
モ同シコトナリ然ラハ小笠原島ノ玳瑁亀ノ甲屑ヲ用
ヒテ試ムヘシ鹿角牛角ノ屑モ同効ナラン

一竹林ニ切殘シタル古株ハ久シク生活シテ容易ニ枯レ
ヌモノナリ然ルトキハ竹林ニ害アレバ之ヲ除クヲ良トス然レモ容

農商務省

易ナラザレバ之ハ長州ニテハ槌デ打込ムト云フ夫ヨリハ鈍ニ
割リ枯ラスベシ忽チ腐ルナリ（石川縣勧業報告ニアリ別ニ
抄録ス）
一肥前佐賀ハ本邦ニテマズ最上ノ果アリ東京辺
ニテハ相州當原白毘良トス且ツ海ヲ埋メ之ヘ塩気ヲ含ミシニハ
然ルナリ原来竹ハ塩水ニ浸シ用ルヲ良トスト云
井氏話セリ

十五年三月十八日　田中芳男

東京大学総合図書館